

# YNAC通信

20周年記念号 NO. 30



## 屋久島エコツーリズム 20年

松本 毅

YNACは、2013年7月1日で設立20周年を迎えました。これもひとえにYNACをご利用いただいた皆様と島内・島外でYNACを応援して下さった皆様のおかげであると感謝の気持ちでいっぱいです。設立当初は、20年先のことなど思いもせず、日々楽しく、面白いことを無邪気にやっていたという感じでした。しかし、この20年で当時とはずいぶん状況が善くも悪くも変わってきました。

私が「ワンダーランドダイバース」(1988年7月~1993年7月)というダイビングショップを始めたころ、ある日、親しくしていただいていた漁協の方から「松本君の写真が漁協の中で密漁者として回されていたよ。」と教えてくれたことがあった。当時は、ダイバー=密漁者として見られていたのです。YNACが屋久島で初めて安房川でリバーカヤックのツアーを始めたころ、どこからともなく「我々の水源で遊ぶのはけしからん。」という苦情が聞こえてきました。フォレストウォークという言葉を使って森歩きを始めると「勝手に他所からやってきて自然で金儲けをしている。」と聞こえてきました。

そもそもガイドという職業がまだ全く認知されていない

時代でした。そんな中で、いろいろな機会に海のスライド映写会をしたり、安房川でカヌーの試乗会をしたり、地元向けの自然観察会をしたりして、ガイドという仕事を少しずつ理解していただけるようになってきました。今では、ダイビングショップは17件もあり、夏には一湊の港はダイバーであふれています。安房川は、100艇以上のカヌーが行きかうようになり、屋久島のガイドブックには、縄文杉や白谷雲水峡のコースガイドが事細かに掲載されるようになりました。観光協会のガイド部会の登録者数は、20年前は10数名だったのが、現在162名まで増えて、まだ新人ガイドさんが増え続けている現状です。

このようなガイド業の発展とともに屋久島の中で「エコツーリズム」という概念が1990年ごろから検討されるようになり、2004年には「屋久島地区エコツーリズム推進協議会」が設立され、今では屋久島において「エコツアー」「エコツーリズム」という言葉が普通に使われるようになってきました。

そこで、屋久島における「エコツアー」「エコツーリズム」の20年の変遷を振り返ってみたいと思います。



## 屋久島におけるエコツーリズムの始まり

1982年IUCN第3回世界国立公園会議において「エコツーリズム」が「自然保護の資金調達機能として有効」とされ、日本では1990年ごろから環境庁、自然保護協会、日本旅行業協会、などで議論が始まりました。1991年には環境庁が西表島において「沖縄におけるエコツーリズム等の観光利用推進方策検討調査」を開始しています。

屋久島で初めてエコツアーという言葉が使われたのは、1992年11月に策定された屋久島環境文化村マスタープランではないでしょうか。屋久島環境文化村構想とは、1990年に鹿児島県が県総合基本計画の14戦略の一つとして打ち出したもので、屋久島環境文化懇談会を22名の著名人や地元関係者を交えて発足しました。その中に兼高かおるさんも参加されていて、



先日(2012年9月写真)お会いした際に、当時のことを懐かしく語っていただきました。1991年6月に開催された「屋久島環境文化村構想で語る会」を私も立見席で様子を見にいった記憶があります。その時に語られた「屋久島ブランド」という言葉が印象に残っています。

92年11月に作成された屋久島環境文化村構想マスタープランの基本戦略第5章「自然体験型観光「エコツアー」の開発」という項目が挙げられています。ここには、プログラムの開発、ガイドの養成、利用者の誘致を進め、新たな地域産業としての育成を図る、とされています。しかし、屋久島環境文化財団のエコツーリズムの議論は、2002年の屋久島エコツーリズム支援会議の発足まで待たなければなりません。YAC設立の直前に我々に財団からこの項目の実現のためにエコツアーのモデルを作ってくれないかとエコツアー関連の資料が送られてきました。その資料を見る限り、当時YACが構想していたものがいわゆる「エコツアー」であると認識しました。これがYACが「エコツアー」を謳うきっかけとなったのです。

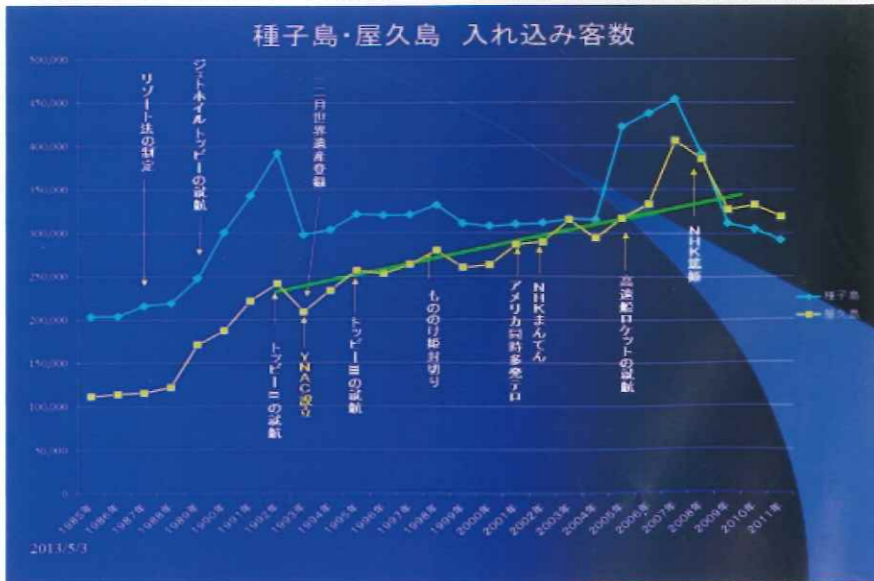
1980年代は、個人の山岳ガイドが10数名いたと思われます。町の観光窓口で斡旋していた個人山岳ガイドや役場の山岳会のメンバーが山岳ガイドを行っていました。その中で、小原をはじめとする数名の山岳ガイドが集まり、1989年7月に「屋久島ガイド協会」を設立しました。これが屋久島では初めての商業的ガイド組織となります。1990年4月の南日本新聞の「ここに生きる」で小原が「屋久島ガイド」として紹介されています。「観光ポイントから外れた何もないところの方が風景として豊かな面もあるのです。」と語っています。

同じころ、カヌーでは、砂川さん(安房在住)がシーカヤックを個人的に乗っている程度でした。環境庁の管理官として赴任してきていた市川もファルトボートを所有していて、砂川さんや私と栗生の七瀬にスノーケリングに行こうとしたのですが、カヌーが水没してしまったため断念したことがありました。一方、安房小学校にカヌーの指導の先生がおられ、授業の一環でカヌーを取り入れていました。そのカヌーを借りて、1990年5月環境庁主催の自然に親しむ集い第1回として「カヌーに親しむ集い」が開催されました。新たな屋久島の川の楽しみ方が提案されたのです。

ダイビングショップは、楠川の「勝丸」、栗生の民宿「亀」が瀬渡し船をダイビングポートとして出していました。ダイビングガイドは行っていませんでした。ダイビングショップとしては、1988年に私がオープンした「ワンダーランドダイバース」が屋久島初となります。

1989年に松本・市川・小原・砂川の4人で「屋久島海洋生物研究会」を発足させ、同年10月に開催された「フォト・デュ・ポアソン」(決められた1日に何種類の魚類を撮影できるかを競うコンテスト:日本水中活動協会・水中映像委員会主催)に参加し、180種を記録してなんと日本一になりました。このことが南日本新聞に大きく取り上げられて、屋久島の海の豊かさが再認識されることになりました。屋久島のあちこちで「魚種日本一」の言葉が使われるようになったのです。魚を探る海から見て楽しむ海に転換するおおきな機会となりました。

このころの屋久島への入込み客数(屋久島に船や飛行機で入った人の数:地元の人の移動も含む)は、1988年12万人からトッピーが就航した1989年には17万人に急増しました。その後、トッピー2の就航により1992年には、24万人まで増えました。アクセスの改善により観光客が倍増したのです。しかし、世界遺産になった1993年は鹿児島島の8・6水害の影響もあり20万人に落ち込んでいます。翌1994年も23万人と92年を下回っているのです。ところが、マスコミは1994年のゴールデンウィークのあと、「荒れる屋久島、世界遺産に登録 登山客殺到」と報道をしています。住民が出すごみ集積場を映して、観光客のごみがあふれて



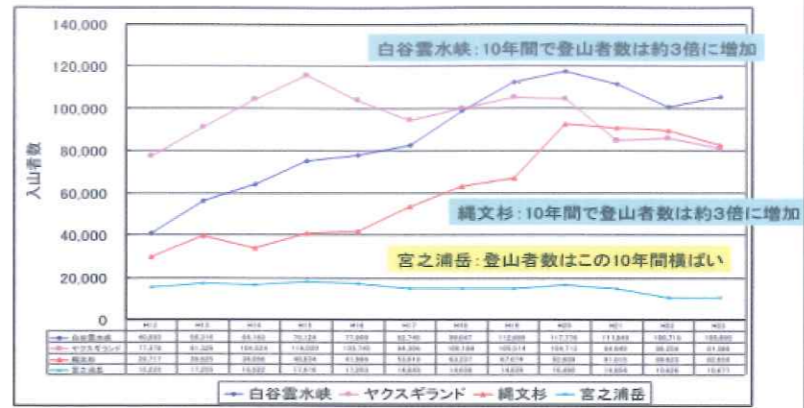
いると報道したのです。これにあわてた県は、「環境キップ制の導入、入山規制を検討する」と県知事が発言してしまいました。実は入込客数は92年より減少していたのです。マスコミは、事実よりも世界遺産登録—観光客の急増—自然が荒れるというシナリオ通りの報道を行ったのです。

この頃、たくさんの新聞・雑誌・テレビなどの取材を受けました。NHKで栗生の水中から生中継をしたこともありました。その中でも忘れられないのが、週刊プレイボーイの取材です。「潜入!今はやりの怪しいエコツアーを暴く」という記事を書くために女性記者が、記者であることを伏せてYACのツアーに申し込んできました。朝、迎えに行くと本人はまだ寝ていて、無理やり起こしてツアーに参加してもらいました。終了後、実は記者であるということを明かし、詫言ながら聞き取り取材をしていったのです。怪しいエコツアーであるはずが真面目なエコツアーであったため、何とも歯切れの悪い記事がプレイボーイに載ってしまいました。その後、申し訳なかったと集英社の別の雑誌に真面目な記事としてYACが紹介された。マスコミとはこういうものかと悟った一件でした。

## ガイド業の定着

1993年我々は、エコツアーガイド専門会社として屋久島野外活動総合センターを立ち上げました。全国でも民間会社としてエコツアーガイド専門の会社を立ち上げた例は少なく、エコツーリズムのシンポジウムや勉強会に北海道から沖縄まで呼ばれて事例発表をさせていただきました。また、屋久島では93年を境にガイド業を専業とするガイドが急激に増え、93年から96年の間に11組織(株式会社1、有限会社3、任意団体7)が立ち上がっています。ガイド人数も96年には40名を超えました。その9割が移住者で、ガイドはまだよそ者の仕事と捉えられていました。しかし、1960年代からずっと下降線だった屋久島の人口が93年あたりから横ばいとなります。Uターン・Iターン、工事関係者などによるものと思われるのですが、中でも島外から移り住んでくる若いガイドの流入は、人口減少の歯止めにも大きく貢献しました。当時、地元の人からよそ者のガイドはそのうち島から出

## 屋久島山岳部の入山者数の推移



世界遺産登録時の縄文杉登山者数は推定1万人。20年弱で8倍に増加。

て行ってしまおうと思われていたのですが、若いガイドが結婚をし、子供を産んで地元の学校に通うようになり、最近ではガイドが地元で根付いてきています。

## ガイドの組織化

1998年12月南日本新聞の世界遺産5周年の特集記事の中で観光ガイドに対する苦情の増加が取り上げられました。このころからガイドの質の低下や利用者からの苦情を挙げて、島内でのガイドに対する風当たりが強くなってきました。

その折、1998年12月屋久島ガイド協会の呼びかけで、ガイド関係者の忘年会が永田の送陽邸で開かれました。32名のガイドが集まり、屋久島では初めてのガイドの集まりでした。

今まで山であった時になんだこいつは!?と思っていた自分の知らないガイドも三岳を飲みながら話しているうちに、結構いいやつじゃないか!と意気投合したり、交流をすることが不要な摩擦を解消し、ガイド同士が協力し合える環境が生まれることに気付いたのです。そこで、ガイドの情報交換や議論ができる場がほしいとの意見が出され、それを受けて1999年4月に屋久島ガイド連絡協議会(以下、ガイ連協)設立総会(会員数40名)が開催され、私が会長となりました。

しかし、一方で行政側の認定制度立ち上げの動きも登山家のO氏を中心に進められていました。屋久島観光連絡協議会(旧上屋久町、旧屋久町、旧上屋久町観光協会、旧屋久町観光協会)は、早急にガイドの認定制度を立ち上げるべく、1998年12月にガイド関係者を招集して組織化の話を持ちました。O氏から出された「屋久島山岳ガイド連合」の案をしめしてきたのですが、それは日本山岳連盟ガイド認定の焼き直しでした。1999年1月から3月の間で研修会を開催し、屋久島山岳ガイド連合を立ち上げる計画だったのです。屋久島ですべて山岳ガイドばかりでなく、自然観察的なガイドやカヌー、ダイビングなど多方面にわたったガイドがすでに活動していて、示された案ではとても不十分であると思われました。何よりも、ガイドを交えて検討する場もなく、一方的に上から押しつけるような感じの提案に非常に苛

立ちを覚えたのを記憶しています。「2~3回縄文杉に行ったらすぐにガイドをしている。」「けがをおぶって山を歩けないような女がガイドをしている。」などの批判的な意見ばかりで、頑強なガイドのみがいいガイドであるかのような言い方でした。

ガイドの登録制度の取材に来た女性記者が、「短パンをはいてガイドをするような女性ガイドがいる。」というような批判的な話をさんざん聞かされて私に意見を求めてきたので、当事者とされる女性ガイドのOさんを紹介してあげると、記者が、取材を終えて私のところに寄り、「とてもしっかりした考えを持っていてすごく格好良かったです。」と感想を述べていきました。批判的な意見も一見ごもつとも意見に見えるのですが、全くの思い込みであったり、きわめて一方的な批判であったりするのが、登録認定制度の議論をする中でガイド業を知らない方々のガイドに対する偏見には驚いてしまいました。もし、十分な議論がされないまま、あの時の認定基準が採用されていれば現在の屋久島ガイド業の発展はなかったのではないのでしょうか。

## ガイドの分裂と一本化

ガイドの組織化を巡る議論は白熱し、急進派と慎重派に分裂していききます。

私たちは、ガイドの現状をしっかりと理解して、もっと十分な議論を尽くして認定制度を立ち上げるべきではと主張をしてガイ連協を立ち上げました。この抵抗が、この頃から「ガイ連協派」「反ガイ連協派」という対立構造を作ることになってしまいます。

「反ガイ連協派」は、行政がガイ連協を認めていないと反発し、屋久島ネイチャーガイド組合を発足させ、救助訓練などを前面に押し出した安全重視の活動を展開していきます。一方、ガイ連協は、ガイド間の交流、質の向上のため、会報を発行し、勉強会や講習会などの活動を展開しました。また、屋久島環境文化財団は、1996年から「屋久島ガイドセミナー」を開催し、研究者や知識人の屋久島に関する講演会・セミナーを開催し、ガイドの質の向上に努めました。体制的には、一本化されないまま個々が活動を展開したという問題点はありましたが、ガイド自身が最も意欲的に活動した時でもありまし

た。屋久島観光連絡協議会は、いきなり組織化を打ち出したことに無理があったと反省し、組織化に関する取り組みはいったん白紙に戻すことになりました。1999年4月に上屋久町観光協会と屋久町観光協会が合併し、屋久島観光協会になりました。屋久島観光協会は、「ガイ連協派」「反ガイ連協派」の対立構造を解消し一本化するべく、ガイドの組織化に乗り出します。1999年8月に観光協会から認定制度を実施し観光協会公認ガイド・承認ガイドのランク付けをするためのガイド専門部会(観光協会本体から独立したガイドの組織)の設置をしたいと打診がありました。その際にガイ連協を解散させるべきとの意見もありました。その後、何度か話し合いがもたれ、ガイ連協の解散は拒否し、「ガイドだけを分離するのではなく、観光協会の中に業種別専門部会を設け、その一つとしてガイド部会を設置する。ガイ連協とはそれぞれの役割を持って協力しあうべき。」と我々は主張して、話が進められてきました。2000年2月に観光協会主催でガイド部会設立の第1回作業部会が開催されました。ここで事件が起きたのです。時間に遅れてやってきたO氏は、酒に酔っており入ってくるなり議長の静しを無視して私を名指して批判し、大声でわめき散らして退場していきました。この事件により、観光協会のガイド専門部会の動きは暗礁に乗り上げてしまったのです。

2001年5月屋久島観光協会総会において、私は観光協会理事に選出され、2002年9月から観光協会ガイド部会設立準備委員会が設置されました。この時点で、我々の主張通り、観光協会内に業種別専門部会として宿泊部会、運輸部会、物販部会、飲食部会、ガイド部会を設置する方向で議論がされました。これでガイド業が他の業種と並列に並ぶことができたのです。数回の準備会を経て同年12月屋久島観光協会ガイド部会設立総会が開かれ、初代ガイド部会長に私が選ばれました。ガイド部会の設立により、これまで行政機関のみで検討が行われてきた山岳部の利用に関する検討会にもっとも現場を知っているガイドがようやく呼ばれて意見を言うようになりまして。それまでは何かガイドは屋久島の自然を使って勝手に金儲けをしているけしからん奴らだ、という非難の目に晒されている感じがしていたのですが、観光業の中でようやく市民権を得た感じがしたのを覚えています。

2003年6月観光協会理事改選における部会長選挙では、「ガイ連協派」「反ガイ連協派」に加え、全く予期していなかった地元出身のガイドH氏が立候補して三つ巴戦となり、私は最下位で部会長職を降りることになりました。トップ当選したH氏が部会長となるのですが不幸事を起こし、2004年4月に辞任してしまいます。仕方なく副部会長の私が部会長代行を務めました。同年6月にガイド部会臨時総会を開催し、残任期間の部会長選を行うことになるのですが、依然ガイド間の対立構造が残っていたので、私が出ることによってさらに溝が深まることを避けるために敢えて立候補をせず、「反ガイ連協派」の地元出身のガイドにガイド部会長を1年間委ねました。しかし、2005年の理事改選



時には、再び私が部会長に選ばれました。2007年の理事改選の際には部会長を女性ガイドO氏に委ね、私は一般理事として現在に至っています。

また、2003年6月のガイ連協総会においても役員改選が行われ、私は退き、若い女性ガイド氏が会長として選出されました。一部の会員から「観光協会ガイド部会ができたのならガイ連協の役割は終わったのではないかと、解散してもいいのではないか」との意見も出されたのですが、運営委員も第2世代の若いガイドさんを中心に生まれ、ますますガイ連協は活動的になっていきます。

2004年4月には、ダイビングの事業者が集まり、ダイビング事業者組合を立ち上げたり、2009年には、シーカヤックの業者が集まり、屋久島セーフティシーカヤック協会を設立しています。

## 本格的エコツーリズムの議論始まる

2002年に屋久島環境文化財団がエコツーリズムの支援事業を本格的に開始したのでシンポジウムに誰を呼ばばいいかと私に相談に来ました。そこでエコツーリズムを議論するならば、まずは屋久島の一次産業を含め、屋久島の人が屋久島の未来を語ることから始めるべきではないかと提案をしました。屋久島環境文化財団特別顧問の大山勇作氏からも同じような提案を受け、2002年9月第1回屋久島エコツーリズム支援会議が開かれました。出席者は、環境省、林野庁、鹿児島県、屋久島両町、区長会、農業組合、漁業組合、観光協会、ガイ連協、ホテル・旅館組合、商工会、知識人、屋久島環境文化財団と屋久島のあらゆる関係機関の方が集まり、座長の大山氏のもとで屋久島のエコツーリズムについて議論されました。その後、2003年10月までに11回の会議が開かれ、「屋久島エコツーリズムの推進のための指針及び提案等」がまとめられました。この事業を引き継ぐ形で2003年11月に「屋久島エコツーリズム推進検討会」が開かれ、さらに国立公園等エコツーリズム推進モデル13地区の一つに選定され、エコツーリズムの議論が展開されました。

- 1、エコツーリズム推進の重要な担い手であるガイドの認定・登録制度の立ち上げ
- 2、里地でのツアープログラムの開発
- 3、特定地域における保全・利用ルールと行動指針づくり
- 4、屋久島エコツーリズム推進基本計画づく

り  
の4つの柱で2004年9月「屋久島地区エコツーリズム推進協議会」が発足されました。

協議会に「ガイド認定・登録制度作業部会」がおかれ、事務局側として、環境省、観光協会、両町、財団、コンサルが入り、検討委員としてガイド代表12名が参加しました。いよいよガイドの登録・認定制度の議論に入ったのです。

2004年10月第1回作業部会が開催されたから、なんと2009年3月まで足かけ5年38回の作業部会が開かれました。当初、議論の中で事務局側のガイド業に対する理解があまりにも無いことに驚かされました。ガイドのクリアすべき基準を議論している中で事務局側から出された「税金を納めないガイドがいるので納税証明書の提出を義務付ける」という話が出た時には、さすがに「ガイドってそんなに悪い人達なのですか？」と叫んでしまいました。議論が「こんなガイドがいるからこれは禁止事項に」など、あたかもガイドを取り締まるべく議論が進むことにうんざりしました。そうではなく、ガイドのあるべき姿をこれからの新しくガイドになる人に示すべきである、ということで「屋久島ガイド」の登録基準、守るべき共通ルールとともに、「屋久島ガイド 心得」を作成しました。

ガイドが金儲けでやっているとか、自然を荒らしているとか、地域に馴染まないとか言われていることに対して我々の理念をしっかりと打ち出したかったのです。

長い議論を経て、2005年10月より「屋久島ガイド」登録制度がスタートしました。認定制度に関しては、未だ結論が出せず検討中です。

2007年6月日本政府は「エコツーリズム推進法」を議員立法で制定しました。日本エコツーリズム協会では、長年エコツーリズムに関する法的裏付けが必要と環境省とともに法制化の動きを粘り強く行い制定にこぎつけました。これ待つかのように屋久島でもエコツーリズム推進法に認定されるべく「全体構想」の作成に取り掛かりました。登録・認定制度とは別に「西部地域の保全・利用」作業部会が2005年11月から2009年12月まで7回、「特定自然観光資源にかかる利用調整システム検討委員会」が2010年12月から2011年4月まで5回開かれています。屋久島町長は、エコツーリズム推進法認定第1号を狙って全体構想の作成に取り掛かりました。屋久島のエコツーリズムを活用した地域づくり、屋久島ルールの構築、利用集中地域の利用コントロール、屋久島ガイドの登録・認定制度、環境教育の推進、情報発信などを全体構想にまとめ、2010年11月屋

久島地区エコツーリズム推進協議会の承認を得ることができました。その中には、縄文杉ルート、西部林道地域、ウミガメが産卵に来るいなか浜を特定自然観光資源に指定し、立ち入り制限、ガイド同行の義務付け（西部・いなか浜）、手続き手数料などの利用制限を盛り込んでいました。2011年6月町長がこの利用制限に関する「屋久島町自然観光資源の利用及び保全に関する条例」を屋久島町議会で承認を図ったところ、縄文杉の利用制限は、屋久島の観光にマイナスになると全員一致で否決されてしまったのです。この否決により、縄文杉だけでなく、西部林道やいなか浜の利用制限ができなまま宙に浮いてしまいました。

今年、世界自然遺産登録20周年を迎えます。屋久島町は、屋久島ガイド認定制度の検討委員会を立ち上げました。ようやく再開の動きが始まりそうです。新たな屋久島のエコツーリズムを巡る動きがスタートする兆しが見えてきました。

20年前にYNACを始めた時には白谷雲水峡はほとんど人がいない静かな森でゆっくりと森を楽しんだものです。安房川のカヌーは流れに身を任せてついうとうとしてしまうような静かな川でした。ダイビングは、プライベートビーチで昼食のあとは浜辺で昼寝を楽しんだものです。20年経ち、世界遺産ブームなんですぐに去ってしまうといっていました。屋久島人気は未だ衰えず、最近では格安団体ツアーが縄文杉や白谷雲水峡に溢れるようになりました。「エコツアー」の言葉も屋久島では普通に聞かれるようになりました。ここまで屋久島人気を高めてきたのはまさしくガイドの存在であったと思います。

しかし、最近ではガイドの需要が伸びているのでしょうか？むしろガイド離れが起こっているのではないのでしょうか？これまでの議論があまりにも屋久島側の都合ばかりに偏ってはいなかったでしょうか？これまでの議論の中に利用するお客様の都合がどれだけ語られてきたのでしょうか？

日々お相手させていただくお客さんは、それぞれの想いでそれぞれの都合を抱えて屋久島にやってきているのです。もっときめ細やかな対応が必要なのではないのでしょうか？一人一人のお客さんにもっとじっくりと屋久島の自然を味わっていただき、心のふるさととして屋久島を感じていただけるエコツアーを提供していきたいと思わずにはいられません。

振り返ってみると、この20年、毎日のように会議に明け暮れ、部会長選で身をすり減らし、ガイド部会の全体会を組織的にボイコットされるなどして虚無感に襲われたこともありましたが、今20年がたつて思うことは、静かにお客さんに寄り添って、自らが屋久島の自然の中で幸せを感じていられるようなエコツアーを20年前と同じように、これからも提供していけたらということです。

## 台風13号その後—自然の20年

市川 聡

今から20年前の1993年9月3日、当時戦後最強といわれた台風13号が屋久島を直撃しました。とんでもない南風が吹き荒れ、電柱は折れるわ、家は吹き飛ばされて島中大変な被害に見舞われました。

我が市川家も多分に漏れず、屋根が吹き飛ばされました。屋根は壊れると放置するわけにも行かず、かといってそこら中の家の屋根が飛ばされている状況では、大工を待っているわけにもいかず、2週間くらいかけて自力で復旧しました。YNACが発足して、まだ2ヶ月くらいしか経っておらず、夏と言っても仕事もなく、大工仕事に専念できて助かったことが懐かしく思い出されます。

この時屋久島の自然も大きなダメージを受けました。南に面した森はバリカンで刈り取られたようにへし折られ、常緑樹の森がまるで冬枯れのように茶色くなってしまいました。モチヨム岳への直登ルートが、大量の倒木で廃道となってしまったのもこの時です。

白谷雲水峡でも、風が吹き抜けたところでは、木々がなぎ倒され、「シャラの大杉」もへし折られてしまいました。

常緑樹が茂る屋久島の森は、森の中まで光が届かず、下草が少なく、暗いけれども見通しの良いというのが特徴です。一方、台風で大きな木がなぎ倒されると、暗い森の中に光が届くようになります。そこで次世代の植物達にはチャンスが訪れます。台風は森の破壊者であるとともに、次世代の森を育てる創造者でもあるわけです。

楠川歩道沿いの一角に台風13号で何本もの木がなぎ倒された場所があります。光が射し込んだ林の下からは、次々と稚樹が芽を出し瞬間に藪となっていき、一時はシカの良い餌場となっていました。台風はシカにとっては天の恵みでもあります。

しかしそのうち一斉に芽生えた稚樹達の間、成長の差が見られるようになってきました。足の速いバリバリノキなどは、すくすくと真っ直ぐに伸びて、誰よりも背が高くなりました。成長の遅いオニクロキなどは、シカに葉を嚼られながらも、ゆっくりと成長しています。どう考えてもこのまま足の速い木が樹冠に到達して、勝ち組になると思っていました。

ところが17年たった2010年、突如足の速かったバリバリノキが枯れ始めました。誰よりも早く成長し、優位に立っていたはずの木が、次々と滅びていくのです。いったい何が起きたのでしょうか？

きちんと科学的な調査をしたわけではないので、ここからは推論となりますが、どうもライバルは同期生だけではなく

たようです。

成熟した森を下から見上げると、それぞれの木の樹冠がパッチワークのように組み合わせ、隙間なく森を覆っています。梢では木々が光を求めて陣取り合戦を繰り広げ、空を分割支配しています。大きな木が倒れ樹冠が失われれば、もちろん林床にも光が届き、次世代の樹木達にチャンスが訪れるのですが、これまで樹上でせめぎ合ってきた隣の木にとっても勢力拡大のチャンスです。一斉に領海侵犯を開始して、隙間を埋めていきます。

この時、台風でできた空間が充分に大きければ、強い光条件で成長の早いバリバリノキが、樹冠に到達して勝ち組になったでしょう。しかし2010年には時既に遅く、樹冠は生き残った木々に埋められ、再び暗い森に戻ってしまっていたのです。強い光が必要なバリバリノキは、ここで力をつけてしまいました。

一方成長の遅い木達は、暗くなっても滅びる様子はありません。次のチャンスを虎視眈々と待っています。足が早いものが、必ず勝つとは限らないのです。でももう20年見守らないと、本当の勝者を見届けることはできないでしょうね。

思えば YNAC も台風13号とともにスタートを切ったといっても良いと思います。最初の頃は燦々と降り注ぐ光を一身に浴びて、伸び伸びと成長していました。しかし20年もやっていると次第に影を落とすものが様々とでてきます。光が降り注ぐときだけ元気に成長するというのではなく、大地に大きく根を張って、じっくりと変わらないものを守り続けることも大切なことだと思います。



**屋久島ガイド心得**

「屋久島ガイドは、次の心得を尊重し活動しています。」

屋久島は世界遺産に登録され、世界に誇りうる原生的な自然を有しています。私達「屋久島ガイド」は、優れた屋久島の自然の中でガイドという仕事を通じて多くの人々に自然のすばらしさを紹介し、理解していただくことで、世界的に関心事となっている自然環境の保全に寄与しているのだという誇りを持って、エコツーリズム憲章・屋久島憲章の理念を尊重し、次の心得に基づき活動します。

- 1、屋久島ガイドとしての「責任」を持って、屋久島の自然環境の保全に努めます。
- 2、屋久島ガイドとしての「自覚」を持って、屋久島の自然を通して自然のすばらしさ、大切さを伝えていきます。
- 3、屋久島ガイドの「役割」として、地域に根ざした活動を行います。



## 「祝！YNAC20周年」

岡山理科大学教授・自然植物園園長 西村直樹さん

YNACの皆さん、20周年、おめでとうございます。

岡山理科大学は、現在、皆さん方の協力を得て、屋久島をフィールドとした野外実習教育を展開しています。松本、小原、市川の皆さんには岡山理科大学非常勤講師として、野外での実習指導を行っていただき、また、若いスタッフの方々にも大変お世話になっています。この機会にお礼を申し上げるとともに、岡山理科大学とYNACが提携するに至った経緯をまとめてみました。

私が初めて屋久島を訪ねたのは2002年の春でした。仕事上の都合もあり、毎年、屋久島を訪ねるようになったのは2005年からで、屋久島の自然にあこがれる学生を連れて行きました。また、コケ調査の際にはいつもYNACの誰かが同行して下さいました。3年ほどするうちに、屋久島行きを希望する学生が年々増えてきましたので、実習としての単位認定を考え始め、それが可能だと判断したのは次のような理由があります。

屋久島の自然が素晴らしいことは誰もが認めるところで、日本の自然を理解する上で大きな助けとなるような理解しやすい自然でもあります。それに加え、星が降るような夜空、温泉、美味しい魚や果物など、野外実習の醍醐味を味わうことができます。しかし、それだけで、学生実習を実施するわけにはいきません。引率者は、実習内容以外に、常に、天候への配慮、同行者の安全や非常時の対処など、さまざまなリスク管理をする必要があります。大学教員がすべてのリスク管理を行うのは大変大きな負担となるからです。

調査に同行してくれたYNACのスタッフは、リスク管理はもち

ろんのこと、屋久島の自然に関する幅広い知識と長年の体験を持つジェネラリストとして、学生に接してくれました。野外実習の現地指導ができ、学生を安心して預けることができる最適・最強のパートナーに出会ったという思いでした。さらに、予想外のことでしたが、屋久島から帰ってきた学生達の多くは元気に動き始めます。屋久島での体験は自信を与え、人間力を高める効果があると確信するようにもなりました。

2008年11月には岡山理科大学とYNACとの間で、連携協力を行う協定を締結し、翌年より、屋久島実習の新科目「エコツアーリズム技法」を開始し、さらに2010年からは、教員免許更新講習の屋久島実習も始めました。どちらも、参加者から高い満足度をいただいています。

屋久島の自然には、大きな可能性がありますが、それを活用できるかどうかは人間次第で、いかに人材を育てるか、が大切になると思います。YNACの皆さん方が、今までに蓄積した経験・知識や人的ネットワークを糧にして、30周年を目指して着実に前進されることを心より願っています。



## カトウヨガと屋久島とYNAC

ライフステージ研究所

カトウヨガ 加藤 眞智子さん

『あーあ、この木はもう土にかえってますね！』

林道の傍らにころがっていた古木を、何んて素敵な表現でしょう！今でも鮮明に覚えているのです。この一言で、YNACのガイドの志すところを感じ、しびれました。

古い手帳で捜したら、第1回目は1997年4月17日から3泊4日、カトウヨガ一行屋久島に上陸!!でした。

『素敵な男達なのよ!!』と何度聞かされたことでしょうか。YNACの松本社長・市川さん・小原さん、この三人の方々に『ぞっこん!』の藤井淑子さんと、当時有隣堂社員の、これ又素敵な女性の土橋珠美さんに、いろいろご配慮いただいて、愛いっぱい、あつと云う間の4日間でした。一行の感激度は大変なもの。屋久島大好き人間や魅せられたの続出です。もちろん私も、味をしめました。当時ヨガ教場を運営していた私は、息子・娘家族の住む、シドニーやハワイへ行くチャンスをつくっても、国内旅行は夢のまた夢でした。『しめた!!』YNACさんと土橋さんがいて下さったら、私も安心して楽しめる!!『行くぞ屋久島へ!!』と――

そして此度YNACさんが、20周年を迎えられる!!おめでとうございます。何としても、お祝いに駆け付けたい!! そこで一計をたてました。

屋久島とYNAC大好き人間集合!

そしてぜひ行ってみたいという初参加のあなた! 大歓迎!!

私加藤と共にYNACの20周年のお祝い(7月1日)にかけつけましょう!!もちろん充実した屋久島の旅と加藤の折に触れてのヨガ指導は3泊4日たっぷり味わっていただきます。体調に不安な人も社会情勢に不安な人も大丈夫!私加藤がついています!!何事も気を気に転じて万事大自然の懐の中!!

屋久島を愛し、屋久島に愛される素敵な旅へぜひご参加下さい♡

前回に引きつづき、風の旅行社に手配をお願いして、6月29日から3泊4日『YNAC20周年をお祝いに行く屋久島の旅』の実現です。

笑顔いっぱい、愛をいっぱい運んでいきます!! 今回もそして今後ともどうぞよろしく。

YNAC万歳! おめでとうございます♡合掌



## 20周年おめでとうございます!

東京在住 中村(旧姓 小山)明美さん

今年2月下旬、母と市川さんの西部照葉樹林ツアーへ参加。その際、YNACは20周年を迎えるとうかがいました。

東京に帰ると、内藤さんへ報告。ちょっと私の記憶が曖昧に...

私「YNAC、今年で30周年だって」

内藤さん「えっ、30年? 20周年じゃないの? 30才で設立して30足したら60才だよ。」

私「あっ、そうか。まだ還暦じゃないよね。」(^\_^;)」

内藤さんは、会社の後輩で、いつも鋭い突込みをしてくれま。YNACと出会うきっかけを作ってくれたのは彼女でした。

「屋久島へ行かない?」と声をかけられ、旅行プランを考えているときに、インターネットで屋久島を検索して出てきたのが、「屋久島野外活動総合センター」。HPの沢登りを見て、とても心惹かれ、申し込んだのが始まりでした。

1998年。内藤さんと、初めての屋久島。

「センター」とつくので、スタッフが大勢いる団体だと思っていたら、おじさんが3人で切り盛りしていたのは予想外でした。沢登りは、小原さん。体験ダイビング、安房川リバーカヤックは、松本さんと。

市川さんとツアーはご一緒しませんでした。思い出深い出会いをしました。

宿泊していた宿のガイドで、白谷雲水峽へ。「旧 ものけ

## 『知的好奇心』—創立二十周年によせて— 屋久島自然クラブ会員 松本洋さん

創立二十周年おめでとうございます。二十年前というと、私たちが、将来は屋久島に住むと決めてから、数年後です。二十数年前は、まだ「世界遺産」という言葉も、あまり耳にしませんでした。バブル崩壊の足音が、聞こえる人には聞こえ始めた頃だったようです。でも、まだ屋久島には、札束を抱えて土地探しの人がいました。

世界遺産登録のニュースは、遠く千葉県市川市で聞いていました。わくわくと同時に、屋久島は人であふれかえってしまうのか、なんて思っていました。

その年にYNACは設立となったんですね。なかなか、意味深いものを感じます。

私たちが屋久島に移住してきて、十二年が過ぎました。YNACに出会ったのは、十年ほど前でした。第一次自然クラブ(編注:2000~2004年)のイベントで、西部林道に行きました。世界遺産の中核の一つである西部林道は、すでに自分でも車で走って、ヤクサル、ヤクシカに会いフムフムと自分なりに納得していました。しかし、YNACは、全く新しい角度から、ものの見え方を提示し、人の知的好奇心を刺激してきます。このときのキムラグモとの出会いは新鮮でした。キムラグモは、切り通しの崖のような所に穴を掘って隠れています。その穴を、直径1センチほどの、蜘蛛の糸で織られた泥のすだれが、塞いでいます。少し浮きあがったすだれの後ろに、蜘蛛の脚が見えます。近くを通る虫を捕食するそうです。むかしテレビで見た記憶があります。変わった蜘蛛だな、と思ってい

姫の森」でお弁当を食べている時のこと。私達のガイドさんへ注意をしてきたのです。今思えば、注意されて当然なのですが、眼光鋭く、メガネがキラリ。とっても怖い印象を受け、白谷で姿を見かけるたびに、気まづい思いをしていました。沢登りでYNACを訪れた時に事務所内にてビックリ。再度注意されるのではないかとビクビクでした。

市川さんが楽しいお兄さんであるのを知ったのは、2回目の屋久島でシーカヤックをした時です。

その後、内藤さんと屋久島へ年に1回~2回のペースで通うようになりました。色々な所へ旅行に行きますが、十数回も同じ場所へ行くのは屋久島だけです。よく、何がいいの?と聞かれますが、なんででしょう。豊かな自然があって、その魅力を存分に伝えてくれるYNACがあるからかな。

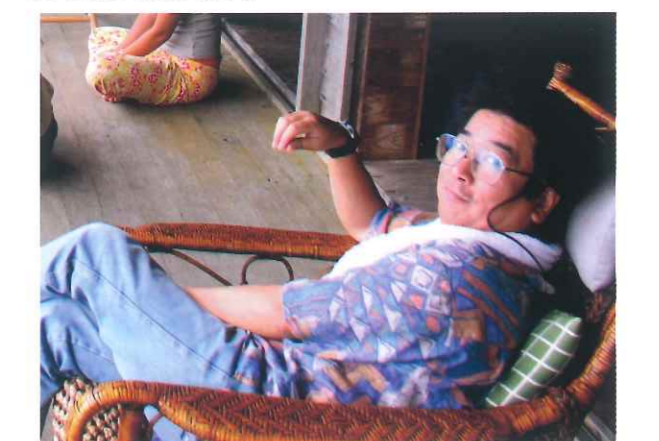
これからも屋久島ファンを増やし続けていかれることでしょう。

30周年で赤いちゃんちゃんこ着て、お祝いしたいですね!



た、そいつが目の前にいます。生きている化石です。腹部に節があり原始的である、などと話は進んでいきます。そして、蜘蛛類と昆虫類との違いの話聞いて、そんなもんは知ってるよーなどと思っていたら、昆虫が空を飛ぶ能力を身につける前に、地面を這いまわる虫を捕まえるよう進化したこと、昆虫が空を飛ぶようになると、空中に巣を張る蜘蛛が新しく進化していくなどと、発想がどんどん転換していき、なるほど、と知的好奇心が満たされていくのです。YNACのこういった展開が私のお好みです。尚、この蜘蛛は我が家にも住んでいて、多くの来客に同じように話ができるのでありがたいことです。

永いお付き合いをいただいています。本当に感謝しています。これからも、自分自身のアンテナも高くして、なおかつ、YNACの高感度アンテナを頼りに、我が知的好奇心を満たしていきたいと思ひます。





## 9年目です

櫻村精一

いつかの号に同じく、また引用。

孔子の弟子・子路が、師を批評した弟弟子の子貢に対し、次のように思った。「俺達には漠然としか気付かないものを、はっきりと形に表す、妙な才能が、この若造にはあるらしいと、子路は感心と軽蔑とを同時に感じた。」（中島敦・「弟子」）

「漠然と気づいているもの」を、漠然としたままにしておくほうが、気持ちよいこともあるだろう。そういう時は、それをはっきり形に表されると、つまらない。たとえば、誰かに抱いた気持ちや、まだ、まとまりきっていない自分の考えなどについて。

形あるものに対しては、そうでもない。目の前の景色や物体に、あるいは現象に、理由と意味を見て取ると、親近感を感じたり、自分と関わりのある物なのだ、と思える。そう思えるようになってからは、考え方も変わる。「あなたはガンです」、とはっきり言われたら、言われる以前の自分のことは消え去ってしまう。自分の身体が、急に、とても大切なもののように思える。前者は映像について、後者は言葉についての、私の印象・感想・利用法である。

言葉は自由で強靱だ。矛にも勝れば盾にも勝る。即効性がある。人を喜ばせ、元気にさせ、やる気を奪い、悲しませる。言葉使いひとつでどうにでもなる。言葉は私の大切な商売道具であるが、使い方を熟知してはいない。だから、どこかから借りた言葉で、いつもその場をしのぐことが多い。

映像はいい。写真でも動画でも、撮影したものを出せば、見る側が自由に解釈してくれる。しかし「雨のシーンを撮る場合、そのまま雨を撮る奴は駄目だ」と、ビートたけしが言っていた。鑑賞者の解釈の幅を狭くするような、直接的に過ぎる描写はつまらないということだろう。

見る側に解釈の幅を持たせる手法を「演出」という。いろんな解釈ができる映像を用意して、一般的な解釈から外れる結末を持つてくると、映像は面白くなる。

言葉を用いて、こういう段取りを整えるのは大変なことで、いつまでも結論を言わない訳にはいかないし、ズバツと言われるとつまらない。ユーモアとは難しく、大切なものである。「求められているもの」を探し出して、

「どうやって面白くそれを示すか」を考えるのが仕事なのだと、覚悟を決めて、生活を懸けなければならない。

私事ながら、尾之間から1つ東の集落、「原（はるお）」に20坪の家を建てた。

2012年4月に結婚、9月から住んでいる。ここでも、ネットを繋げばいろんな映像が手に入る。メールに3メガの写真が付いていてもパツと出てくる。地上波TVは屋頃の映りが悪いが、停電時以外は特に不便を感じない。こんな田舎から、割とスムーズに情報発信や収集ができるなんて9年前から見たら大進歩だ。

情報産業に対し、「受け取り手」側の視点から見ると、テレビにテロップが頻出し始めた15年ほど前に民放に対して感じた違和感を、NHKからは相変わらず感じない。「デザインあ」「考えるカラス」「テクネ」など、映像演出と言葉のバランスを、エンターティナーとして学ぶ上で、良いテキストになっている番組が多い。いまでは、そういうものしか見なくなった。

（それは私にそういう興味があるからで、発信側は、そういう客層から支持を得ようと頑張っているのはわかる。マーケティングと先読みが巧いのである。）

YNAC通信のような紙面媒体も、ハリリー・ポッターの月刊予言者新聞みたいに「飛び出して動く」ように、そのうちなるのかと思っていたら、それもモバイルで可能になってしまった。ブログもFacebookも、今や、ある種のYNAC通信になった。

現在、屋久島という「土地そのもの」が売り物になり、登山道（これは、登山者を安全に導くためのものではなく、登山者の踏圧から地形を守る為にある）上の移動をメインに、そこから見える景色を楽しんでもらうことになっている。映像の流れの順序が、ある程度決まっているということで、その流れを快適に感じるためのスピード、リズム、天気や風向きを考えた演出、耳に心地良い会話などを提供するのが我々の役目だ。情報発信者の立場にあって、この自覚はとても大切なことである。

山の中では、形あるものの紹介がほとんどで、大抵の物を「言葉」で表して鑑賞する（海中では、映像鑑賞が優先する）。見たものを言葉に代える作業は、非常に強い力を持っていて、我々に関わった人は、きっとその後で考えや気持ちに大きな変化があるだろう。その変化が、リフレッシュなど、「善いもの」として取り扱われるように、これからもサービスを徹底してゆきたいと思っている。

## 山ガールあれこれ

池田 裕二

森を歩いていると、少し前までに比べ、ジャージ姿の女性が減り、カラフルなタイツ+山スカート or 短パンを着こなした方が増えた、と実感します。高校のジャージは今や絶滅の危機です。カラフルなウェアに身を包んだ山ガールが増えている、そのルーツに迫ります。

### 【野外フェスで山ファッション！】

思い起こせば2003年の野外音楽ライブ Fuji Rock Festivalの参加アーティストはすさまじいラインナップ。アンダーワールドにマッシュヴァアタックにビョーク。実に豪華。（行ってないけど）

2000年代初頭の野外フェスの観客は、アウトドアウェア・ギアを揃えて参加をしている人はまだまだ少数派だったという。レインウェアの代わりに大型のごみ袋に穴をあけてポンチョとして使用し、靴はスニーカー、パンツはジーパンで泥まみれ。まだまだアウトドアスタイルは広く浸透していなかった。

2007年頃、次第にファッションナブルなアウトドアウェアに身を包んだ女性が野外フェス会場に増えた。タフで高性能なウェアは、キャンプ型野外フェスには最適な装備だった。

「山ガール」誕生の起源がここ。

少し昔まではアウトドアウェアは色が限られ、赤、青、黄、緑、ピンク、黒、のまるで戦隊モノかと思うくらいのラインナップしかなかったが、ここ数年で中間色や水玉・柄物、おしゃれな配色のパッチワークデザインなどがリリースされ、グッと選択肢が増えた。アウトドアファッションは20代30代を中心に、定番スタイルとなった。

### 【女子、野外活動へ】

フェス用にアウトドアウェア・ギアを揃えた人が次に向かったのが「トレッキング」。2005年頃に流行したパワースポットブームに影響を受け、霊峰「高尾山」や「富士山」への登山の人气が高まる。2009年、10年と富士登山ブームは最高潮に達し、夏のたった二か月で30万人を超した。私も流れるようにブームに乗っかり、富士山に挑戦し、寒さと雨に立ち向かい果敢にも3200mで引き返し温泉へ直行した。その時、目立ったのがファッションナブルなアウトドアウェアに身を包んだ女性たちだった。

彼女たち「山ガール」が増えた大きな理由のひとつが、2009年の、女性向けアウトドア雑誌「ランドネ」の発刊。

野外フェス、キャンプ、トレッキング、タウンユース、などをキーワードに、かわいらしいアウトドアウェアの「着こなし」特集が人気の雑誌。山スカート、ショーツ+タイツのスタイルを定番化させたともいえる。

野外フェスだけでは物足りなくなった多くの女性たちが富士山や屋久島などで本格的な野外活動を始める時代となった。（ファッション誌 GO OUT の発刊は2007年でこちらは男性向け）

### 【写真はステキ】

2008年、OLYMPUS社より10m防水、耐衝撃性を兼ね備えたアウトドア好きにうれしいコンパクトデジカメμシリーズの人気機種「μ1030SW」が発売される。雨の多い屋久島で活躍した私の愛用品。写りも良かった。高性能防水デジカメも3万円を切る価格帯で入手できるようになったのはこの頃。

2009年、OLYMPUSミラーレスカメラ「PEN」が発売される。小型で、手軽に撮影を楽しめる独創的な機構や普遍的な魅力あるデザインを採用し、まったく新しいコンセプトのデジタルカメラとして若い女性を中心に人気が高まった。写りに定評のあるレンズに加え、ア

ートフィルターで表現方法が広がったため、ブログやHP、SNSなどに美しい写真を載せるネットユーザーが一気に増えた。

山でデジカメを使用し本格撮影に挑戦する女性が増えたのは、こういった人気機種のリリースの影響があるのかも。現在屋久島では本格撮影派とスマホでスナップ派にわかれるものの、スマホのバッテリー消費の早さからデジカメのほうが有利。

山ガール誕生の要素として、

☆「フェス」から「フィールド」へ

☆アウトドアファッションの普及

☆デジカメの進化、ブログ、SNSの普及

この3つのことが大きく関わっているといえるのでは？

### 【屋久島の山ガール】

幅広い世代に人気の屋久島、20代のファッション事情最先端世代から60.70代のバリバリ登山家シニア世代まで多くの山ガールを見かけます。中には自称「山姥（やまんば）」と自虐ネタを披露されるシニア世代もいらっしゃいますが、何をおっしゃいます、とてもお元気で私たちガイドも体力負けしてしまいます（汗）若い世代では60Lザック・テントを担いで宮之浦岳縦走する本格山ガールも。雨にも負けず、風にも負けず、屋久島の自然を思いっきり楽しんでいます。



【Model: Maikoちゃん 撮影地:ヤクスギランド 撮影:市川】

町がコンクリート化され、子供たちの自然離れが懸念される現在、山ガールたちが積極的に野外へ出て、自然の楽しさ・美しさに感動し、その喜びを是非とも後世の子供たちと共有してほしいと願います。

1年を通じて様々な自然と触れ合うことのできる屋久島は、山ガールたちの絶好の遊び場。今年も多くの自然大好き山ガールたちに出会えることを楽しみにしています。もちろん海大好きな磯ガールも大歓迎です。

### 取材協力

Diaries 山口様(茨城県つくば市 洋服店)  
上野商会 商品企画部 佐々木様(マナスタシュ担当)  
GO OUT 編集部 斉藤様  
オリンパスイメージング株式会社 永井 広様  
ご協力ありがとうございました。



## 夢の向こう側

松本 淳子

今から20年前、松本、市川、小原の3人とその家族、そして移住して来てからお世話になった島の何名かの人々を招いて、昔の「ワンダーランドダイバーズ」の事務所で「屋久島野外活動総合センター(YNAC)」の創立会が行われた。

それは実にささやかな出発式であったが夢を抱きそれを実現させようとしている3人の男達は本当に素敵だった。

その頃まだ小さかったそれぞれの子ども達も今では皆大人になり、自分の夢に向かって歩いている。

「夢」…大人は子供たちによく「将来の夢は何？」と尋ねる。それに対して子ども達はサッカー選手だとか学校の先生だとかの職業で答え、尋ねた大人も「がんばってね」とか「夢がかなうといいね」と返す。これは努力をしてその職業に就いたら「夢」がかなったことになり、その先には「幸せ」があると皆が考えている証なのだろう。夢の向こう側には幸せの森があるから頑張りましょうと。

東京に住んでいて、休みの日には子連れでダイビングツアーに参加していたわたし達が、海と山に魅かれて屋久島を選んで移住したのはYNAC創立の6年前だった。どうして屋久島に移住したのかと会う人会う人に聞かれた。きっと「これが夢だったのです」と答えたら多くの方はすんなり納得してくれて、それ以上のことは聞いてこなかっただろう。しかしわたし達はこれで夢を実現したという実感がなかったの、そうは答えられなかった。

でもそのうちわたし達はぴったりくる言葉を見つけてそれをあちこちで書いたり話したりした。

「屋久島によばれたのです」と。

それは屋久島移住というアクションの向こう側に広がる地平…この土地で何かを為す役目があるといったような(過剰な)自我意識だった。

この意識は若い頃からわたし達の人生を有意義にもし、

## 幸せの感じ方

比留間雄太

YNAC 創設の20年前、僕はちょうど8歳。当時、日本最大規模の開発が行われた多摩ニュータウンの集合団地の中で、小学校だけでも全校生徒1000人の集まるコミュニティの中で育った。デパート、映画館、コンビニ、遊具の揃う大きな公園。何不自由なく、その後、大学卒業するまで半都会半田舎の環境で過ごした。ただ、この社会への疑問を心の奥底で持ちながら。。。

今は「自然の中で生活がしたい」と社会人1年目にして早々と抱いてしまった直感を信じて、日本の原風景の自然が多く残るこの島で生活している。もう5年目。学生時代の友人からは Facebook 等を見て「いつも楽しそう！」と言われ、「そうだね。とりあえず、幸せだよ。」と返す。

今は自然を身近に感じる事がただ「幸せ」なんだろう。その中には、黒味岳山頂の足のすくむような岩の上、沖に流されたら、このまま沈んだら。と思う恐怖の海の上、急な天候変化で雷雨からの逃げ場を探す時など、「危険」な状況で普段では味わえないその瞬間も、生きている幸せに繋がる。高度経済成長後、やっと環境保護運動が加速してきた1980年代に生まれ、安全管理社会で過ごして来た僕にとっては、こういった「自己責任」な初歩的なアウトドア体験自体が新鮮な

またややこしくもしてくれるものだった。

連れ合いにとって後にこの「屋久島によばれた」という使命感のような言葉が YNAC を創出し屋久島のガイド業の基礎づくりに身を削っていた時代、思い通りに行かない様々な事柄を乗り越える力になった程に「夢」という言葉よりも格段にパワフルだった。しかし同時に彼は「使命感うつ」にもなった。その「うつ」は3年後ビデオを撮りながら吉田港の堤防を歩いていて、テトラポッドの上に転落した際に海に落ちて流れて行ったようだ。落ちてすぐ携帯の写メで撮影し送られて来た血まみれの映像を見てわたしは確信した「もう大丈夫だ」と。まさにその時魂が体に戻ってきて生還したのだと安心した。

そしてつい最近夫婦二人の食卓で YNAC 創立 20 周年の話になった時「当時は屋久島によばれたなんて言うていたけど、本当に屋久島はわたし達をよんでいたのかな？」と聞いたら「よんでなかったかもね」という答えがあっさり返ってきた。これは勿論今までやってきたことを否定しているのではなく「屋久島によばれたと思いたかったわたし達がいただけ」という話した。

しかしそれをエンジンにして「夢」をかなえたのだから「いま、ここ」は確かに幸せの森なのだ。それなら今その幸せを十分に味わわずには勿体ない。不足や杞憂を挙げるよりもまずは幸せを味わおうと考えられるようになったのは年齢を重ねたからなのだろうか。

20年前に互いを信頼しあい大きな夢を抱いて YNAC を創立した3人の男達の「いま、ここ」の「幸せ」な姿をこの目で見て、そして「ねえ、やっぱり素敵だよ」とわたしは言いたいのだ。

なんだろう。

この「新鮮さ」が僕らの幸せに繋がるのなら、今やこの日本自体、宝の山だ。世界中の便利な最新電子機器を身近に手に入る事ができる。片や、海に囲まれ何億年も地球の命を受け継いで来た素晴らしい自然も多く残る。その「新鮮な物」を今は、自分のスタイルに合わせて「選ぶ」事ができる。強く言えば、選ばなければいけない時代。

「僕は、もっとシンプルな生活をしよう。」と6年前、住む環境自体を清里や屋久島という自然の中に拠点を移した。今、今後の日本の社会を支える同世代の人達が、明るい未来を想像して自然の中で精力的に活動し始めている。その人達と今後多くリンクをしながら、日本の農業、畜産、漁業における昔の伝統を再確認しながらも、使える最新技術も駆使し、今後の日本や地球の未来を創造していければと思う。

なぜ「この地球の自然があり続けて欲しい。」と願うのか。子供達に伝える前に、僕ら大人も一緒に気持ちで遊ぼう！この屋久島、そして、僕らの住む日本は宝の山です。

20年前の YNAC の熱い思いにも、全国の今まで環境教育を発展させて来た方々にも、大きな感謝！

## 「20」

渡部 幸

みなさま、初めまして。YNAC 研修生のわたなべさと申します。4月から屋久島で暮らし始め、日々先輩ガイドの後を追いかけています。毎日が新発見・初体験の連続です。楽しいです！

さてさて、今年は YNAC 創立 20 周年！

そんな、素敵な節目から屋久島で暮らしていけることに、なんだかワクワクです。

20 といえば、私は 20 歳のときに初めて屋久島を訪れました。愛媛(松山市出身です。)から自転車を持参して、島内くるとゆるり旅。公園や砂浜にテントを張りながら、釣りをしたり、山に登ったり。屋久島の自然に身をゆだね、とっても朗らかな時間を過ごしました。

屋久島が暮らしの場になるとは、夢にも思っていなかった 20 歳から有年。せっかくなので、自己紹介も兼ね、今回移住するまでをざっくり振り返ってみたいと思います。

屋久島に来る直前までは、西日本最高峰を持つ石鎚山とその麓の里山で自然観察ガイドとして約 5 年間活動していました。そして、その傍ら石鎚山周辺地区に残っているたくさん「暮らしの知恵」を地域の方から学ばせていただきました。



まるで「ヤクザル」のよう！「みの」の作り方も教わりました。

そのような地域特有の自然や文化を学びたい！と思ったきっかけは青年海外協力隊員として約 3 年間、コーヒーで有名な中米・グアテマラ共和国で生活したことにあります。

何不自由のない日本での生活から、水も電気もままならないグアテマラでの生活へ。

そこでは、環境教育隊員として、密猟途中で警察に保護された野生動物の子どもたちを育て森へ帰す活動や、野生生物保護地域内にある小学校での巡回授業、動植物のモニタリング調査などを行っていました。



グアテマラでの活動の様子

グアテマラで生活する中でいつも考えさせられていた事は「水」について。私が活動していた地域は水がとても貴重な地域でした。ひとつのエピソードにこんなことがあります。

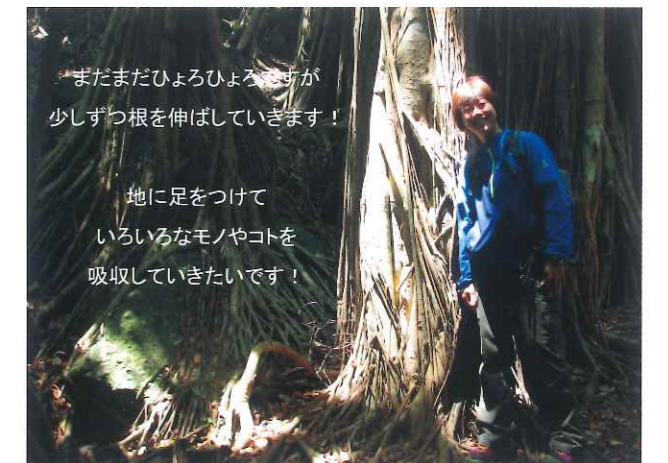
現地入りした当初、リサイクルシステムが確立されていないのに使い捨て容器が当たり前に使われている日常を目の当たりにし、「使い捨てはもったいないから繰り返し使えるものに換えていこうよ」と提案したことがありました。すると「水を食器洗いに使うくらいなら、飲み水にするよ」との答え。

衝撃を受けました。

「湯水のように使う」という慣用語もあるように水が豊富な国・日本で育った私は、気づかないうちに「リサイクルすることこそが正しいこと」という価値観をグアテマラに持ち込んでいたことに気がつきました。

ひとつの方向からではなく、いろいろな方向での視点を持つように。点ではなく面としての広がりを持つように。

これからの YNAC 生活で正 20 面体(黄金比の長方形を 3 枚組み合わせることで作ることができる多面体。3 次元空間で最大の面数を持つ)に少しずつ近づきながら、みなさまとすてきな「屋久島時間」を共有していきたいと思っています。



まだまだひよろひよろですが、少しずつ根を伸ばしていきます！

地に足をつけて、いろいろなモノやコトを吸収していきたいです！

それでは、屋久島でみなさまと一緒に笑いあえる日を楽しみにしています。

よろしくお願いたします。



## 泊如竹の時代

### 小原比呂志

屋久島出身者で、歴史上もっとも有名な人物は、なんといっても泊如竹（1570～1655）です。いまから 500 年も前の人ですが、屋久島では「屋久島聖人」「如竹さま」と尊称され、その人生は半ば伝説として伝えられてきました。

如竹の時代、それは混沌から新しい秩序へと向かう激動の時代でした。

屋久島をおおむね領土の西南端とする 16 世紀の日本は、室町幕府が弱体化して、各地で大名や寺社勢力が競い合った戦国時代から、実力でトーナメントを勝ち上がった織田信長、豊田秀吉、徳川家康による天下統一へと向かった時期です。

一方、屋久島をその東端に置く東シナ海では、明が朝貢貿易という形で成立させていた、琉球王国、室町幕府、東シナ海諸国などとのオフィシャルな経済秩序が崩れ、かわりに民間経済勢力として武装商人や倭寇の活躍が激しくなり、鉄砲を種子島に伝えた王直や大隅半島から出発した徐海のような海賊貿易王が名を上げます。

そして九州では島津氏が覇者として台頭し、西からはマラッカを滅ぼしマカオを占拠したポルトガルが、東からはメキシコから太平洋を渡ってくるようになったスペインが参入します。このころの東アジア海域は、ほとんどマンガの「ワンピース」の世界です。

これらの動きの原動力となったのが、石見銀山と南米ポトシ銀山での銀の大量生産です。倭寇は中国南部の各拠点から、日本銀と、ポトシ銀が運ばれてきたルソン（フィリピン）を中心に激しく活動し、経済興隆は、日本の織田信長の台頭、秀吉の朝鮮・明への侵攻と敗北、そして女真族の明侵攻と清の建国へと大河のように続いてゆきます。

このように東の日本の戦国状況と、東アジア海域の経済状況は連動していました。歴史上、海外（中国）との貿易利権を掌握した者が常に日本の覇者となってきたのです。

屋久島は、この東西二つの激動世界の間地点にあり、いずれの大波をもろにかぶる位置にありました。泊如竹は、まさにこれらの世界の狭間で活躍した人でした。

如竹の生涯をよく伝え、現在その拠典とされているものは、薩摩藩が 1843 年に編纂した「三国名勝図会」巻之二 鹿児島 造士館の項の一部、そして巻之五十 屋久嶋 本仏寺の項に収録された如竹翁伝です。巻之五十は屋久島で書かれたものようで、如竹の事業について書かれています。ただし遠い昔の言い伝えなので、河童を怒らしめたとか、いろいろ伝説も含んでおり、そのまま鵜呑みにはできません。また法華宗の研究雑誌である「桂林学叢」16 巻に収録された松井日俊氏の「儒僧の泊如竹日章」は、法華宗側の資料を大幅に盛り込んだ必読の文献です。

如竹の伝記としては、家坂洋子氏の「薩摩隆絵巻」（絶版）が唯一のもので、屋久島の郷土史家、故山本秀雄氏の考証を盛り込んだ意義深い作品です。

これらの仕事に加え、最近めざましく研究が進み、多くの成果を上げている東シナ海史、琉球史など、屋久島周辺の時代の流れという視点を関連付けて、如竹の生涯をまとめてみたいと思います。

#### 1. 船大工の子

如竹は 1570(元徳元)年、安房の船大工、泊太次右衛門の家に生まれたとされています。幼名は市兵衛でした。船大工というとなんとなく貧しい家を想像しますが、はたしてこの当時の屋久島の船大工の仕事はどのような規模のものだったのでしょうか。

この頃の船がどういう大きかったかは、分かっていません。しかし種子島に関して一つ手掛かりがあります。1520 年、幕府管領だった細川高国から種子島氏に対して、遣明船の建造が発注されているのです。このころの遣明船の大きさは、700 石から 1700 石といわれていますので、トン数に直すと 100～200 トンほどもある大型船です。このクラスの船なら 150 人以上も乗り組むことができたといわれています。

細川船建造の直後に種子島氏が整備した海の砦「楠川城」は、砂鉄の採れる砂浜のスロープを前にし、木材の宝庫である白谷雲水峡を背

後に抱えています。砂鉄は船釘として優れており、スギはいうまでもなく縄文時代以来の優秀な造船材です。

また江戸時代の記録になりますが、安房、宮之浦、永田、一湊などの港には小船だけでなく、大船があったとされています。安房の大船は泊家が所有していたという説もあります。

これらのことから考えると、造船材の宝庫で、しかも砂鉄から船釘を作ることでもきた屋久島には、大型の造船所があった可能性があります。泊太次右衛門は大型の船を手掛けた造船業者であったかみれず、如竹も貧しい小僧などではなかったかもしれません。

#### 2. 安房本仏寺に入門、そして本能寺の再建

日蓮宗は激しく分派しながら複雑に発展してきた教派ですが、1565(永禄 8)年に、対外関係上「十六本山会合」という各派間の大連合を行い、政治的に結合しています。ここでは総称として「日蓮宗」と呼びます。

安房の本仏寺や宮之浦の久本寺は、いずれも日蓮宗の一派である法華本門流に属し、1488 年に建設された名刹です。開山は本能寺の日増上人、開基は種子島時氏です。

如竹は、この本仏寺に入門しました。武家や公家以外に生まれた優秀な人間は、寺に入るのが唯一出世の方法です。僧は世俗を離れて動ける立場ですので、身分の上下に関わらず自由にさまざまな活動ができるのです。

日蓮宗の僧は普通日蓮にちなんで日の字が名前につきます。如竹の僧名は日章ですが、何時からそう名乗ったかは分かっていません。ここではすべて如竹と記述します。ちなみに原の益救神社に奉納された石碑に「妙法本住坊日章拝」との文字があり、これは如竹のことだろうと言われています。

さて 1987 年、如竹は京の本能寺に入門したとされています。正確には、本能寺とともに二大本山とされていた尼崎の本興寺に入っています。本能寺は布教の中心だったのに対し、本興寺は学僧が学ぶ教育機関で、ちょうど大学のような位置づけだったようです。この時代、九州の離島からこのようなハイレベルな寺に入門したのですから、如竹が相当な秀才だったのはまちがいありません。

本能寺といえば、1582 年に織田信長が明智光秀に討たれ、その際本堂は激しく焼け落ちました。如竹が上京した年に、なんと本能寺は焼け跡で、秀吉の命で軋地を余儀なくされていたのです。

当時、本興寺の貫主（日蓮宗の大寺院のトップ）は日逕(につけい)上人でした。この人が種子島出身だったと聞くと、ちょっとびっくりしませんか？ 実は種子島氏は 15 世紀後半の日良法印、日増上人による布教以来、一貫して日蓮宗の大檀越（スポンサー）だったのです。

16 世紀、現世利益を認める日蓮宗は、京都で町衆(商工業者)の支持を集め、彼らの自警組織の中心として、いわば一つの都市国家を作っていました。本能寺などの日蓮宗寺院は、より強力な寺社勢力である比叡山との抗争を激化させ、1536 年、ついに敗れて京を追放されてしまいます(天文法華の乱)。下京は灰燼に帰し本能寺も焼け、僧たちは堺へ避難しました。

大変な事態ですが、このとき公家出身であった貫主日承上人は、翌 37 年から 39 年まで種子島に滞在しています。おそらく避難と支援要請のためでしょう。日蓮宗は 1547 年に京への帰還を許されますが、45 年にはすでに土地の確保、資材の調達等は行われていたようで、種子島氏の貢献は少なくなかったと考えられます。

この時期に管領（1539～1548）となった細川晴元に対し、日承上人は種子島からの鉄砲や火薬の調達を仲介しています。僧がそんなことをするのかと疑問に思いますが、高野山や根来寺など、寺院は兵器産業を盛んに行っていました。

「本能寺の変」で本堂が大爆発したという説がありますが、本能寺自体が種子島氏の出荷した火薬などの貯蔵庫になっており、これが引火したためではないか？ という見方もあるようです。

日逕上人は当然種子島氏との太いパイプを持っていました。1589 年、種子島氏などからの多額の寄進を集め、その資金力をもって本能寺の貫主を兼任し、再建を担当することになりました。このとき日逕に同行し、部下として働いたのが、屋久島出身の如竹なのです。

この 1589 年は、九州を制圧した豊田秀吉が島津氏に対し、屋久島の木材資源量の調査と方広寺大仏殿用材の拠出を命じたあの年です。担当者は石田三成と細川幽斎です（ちなみに幽斎は、前述の管領細川晴元派であった細川元常の養子）。三成は抵抗する島津義久に対し、「木材運搬船がないなど言い訳にならぬ、早くやったほうが身のためだ」と強圧的な態度に出ています。

この時期に小豆島の大型船 11 隻が、屋久島の隣にある竹島に廻航されたという記録があるため、この船が方広寺用材として屋久杉を運んだのではないかと考えられているわけです。しかし方広寺材だという確たる証拠があるわけではありません。もし本当に屋久杉が運ばれたとすると、それは本能寺用材であった可能性も考えられます。

日逕の手元として本能寺再建の実務にあっていた如竹。その父親は、屋久島で造船業者として当然ながら屋久杉を扱っていたはずです。如竹は、このとき屋久杉の伐採権を掌握していた種子島久時をスポンサーとして、若干 20 歳ながら本能寺再建にかかわっていたわけですから、屋久杉の「仕入れ」に動いた可能性はなかったでしょうか？記録はありませんが、実に興味深いところ です。

#### 3. 儒教と薩南学派 南浦文之 薩摩藩外交畑 NO.2

如竹は日蓮宗の僧でありながら同時に儒学者だったと言われます。さてこの儒学とは何でしょう？「孔子の論語のことだけっけ？」とか「仁義礼智、忠信孝悌」くらいまでは思いつくのですが、それ以上はよくわかりませんね。

如竹は儒学のなかでも、「朱子学」という、宋の時代に発達した学派の専門家でした。朱子学は、四書五経といわれる儒教の雑多な各種テキストの新解釈の学門で、そこに世界は「理」という根本原理によって成り立っており、この「理」が「気」という万物を構成するエレメントの運動に秩序を与えるという、非常に近代物理的なものの考え方を導入した学問です。ちなみに中国の「科挙」はこの朱子学に関する試験です。

日本では、この朱子学が幕藩体制を正当づける政治理念として、徳川幕府によって権威づけられたのです。如竹の頃にはむしろ中国語文献の解釈学として、大名が中国（明）と外交を行う際の中国語読解や文書作成が重視され、そのために儒学者が雇われたという面もありました。

この時代、学僧は宗派を問わず一般教養として四書五経や詩歌を学ぶものだったようです。如竹は本能寺時代に、朱子学者のトップとされていた藤原惺窩（ふじわらせいか）や、やはり高名な朱子学者である鹿兒島正興寺の禅僧、南浦文之（なんぼぶんし）の講義を京で受講しているようです。

惺窩は朝鮮侵攻の真つ最中だった 1596 年、明に渡航すべく鹿児島に向かい、失敗します。京都で講演会を成功させて朱子学者として名声を得たのはこの後のことですので、如竹がその講義を聞いたのもその後のことでしょう。

本能寺新築以後の如竹に関しては資料がほとんどなく、京都での彼の朱子学のレベルがどの程度高かったのか、その後なぜ鹿兒島へ移ったのか、はっきりしていません。ただ如竹と面識があったらしい朱子学者の室鳩巢が、本能寺時代の如竹について「法華の教を学ぶ。然るに心樂しまず」と記しており、なにやら屈託を感じ、新天地をめざした気配は感じられます。

敬愛する文之が開発した漢文読み下し方法(文之点)を、藤原惺窩が無断流用して講義していたことを憤ったからだ、という説もあります。あるいは同郷ということもあり、文之が如竹を見込んで勧誘したのかもしれないと。

1592 年から 98 年の朝鮮侵攻従軍、1600 年の関ヶ原での敗北を経て、島津氏は経済的に疲弊しきっていました。このためなんとしても貿易で藩財政を復活させるべく、琉球を仲介させた対明関係の修復に力を注いでいた島津氏にとって、外交政策は非常に重要かつ困難な仕事でした。国分の正興寺にあって、その実質的な外務官僚として重責を担っていたのが文之でした。優秀なスタッフは欲しかったのではないでしょうか。

1603 年、文之は徳川家康に招聘され筑前の禪光寺や相模の建長寺へと赴任させられます。それを島津義久が再び正興寺へ戻すなど、義久と家康の間で文之を奪い合うかのようです。そのような 1605 年、泊如竹は正興寺の文之のもとへ移ります。

5 年に満たない在籍にもかかわらず、この期間の実績を「如竹学業あり。桂庵が学（朱子学の薩南学派のこと）、文之如竹（の時代）に至りて大に興る。海内文之如竹と并せ称す」とまで称えられています。これは、後の朱子学テキスト出版の実績もあるのでしょうか、それにしても単に文之の元で学んだ、というレベルではなく、如竹が文之の No.2 として重要な地位にあったと読みとるべきかもしれません。

1606 年、琉球尚寧王は明から冊封使を迎えます。このため奄美侵攻を計画していた島津氏はこれを中止して、冊封使の夏子陽に対して明の商船の毎年島津領内への来航を要請しました。この際の外交文書など南浦文之が担当しています。

なお、如竹は日蓮宗学僧でありながら、禅宗である文之の寺に入ることになりました。このため“日章”を使わず、朱子学者として如竹散人と名乗った可能性もあります。

#### 4. 本仏寺住職と屋久杉 薩摩藩財政難

さて、関ヶ原で豊臣側の西軍に属し敗北しながら、島津氏は徳川幕府に領地を安堵されます。しかし、領内は義久と弟の義弘、義弘嫡男の家久の3派閥に分かれ、領内の掌握ができず、十分な軍役を課することができません。

加えて徳川幕府は 1606 年、江戸城増築の石垣普請のためとの名目で、財政逼迫する島津氏に対し、なんと石材運搬船 300 隻の建造を命じたのです。この船の大きさは不明ですが、小型船ということは考えられません。大量の船材が必要になります。

まさにこの年、島津氏は盟友のはずの種子島氏から、木材の宝庫である屋久島の伐採権を正式に(?)入手しました。

少しさかのぼる 1582 年、島津義久は種子島久時に対し、屋久杉の出荷販売を禁じます。さらに 1595 年、豊臣氏による島津領内配置換えで、種子島氏は一時的に知覧に転封され、種子島・屋久島は島津領とされました。島津義久はここで「屋久島置目」を発令し、あらためて屋久杉の他領への出荷を禁じます。

知覧転封は 1599 年に解除され、種子島氏は種子島に戻りますが、その際屋久島だけは島津氏がしばらくそのまま借用するという形にされまいた。

1606 年、この時の借用書類が、種子島氏の一族内のトラブルで、親族の種子島時定が自殺する際に燃やされてしまうのです。これをもって、借用していた証拠は無い、ということになり、屋久島の所有権は島津氏に確定します。

このとき屋久島を奪われた形になる種子島久時はそれに先立って島津本家の家老に就任しており、立場上いろいろ裏事情があったものと



思われます。いずれにしても島津氏による屋久杉の本格的開発はここに始まりました。

そしてこの年、如竹は琉球関係で忙しいはずの正興寺を離れ、日蓮宗に復帰し、屋久島の安房本仏寺に住職として派遣されます。日蓮宗の住職は、本山の人事として各寺に配置されるのですが、はたしてこれほどのような意図の人事だったのでしょうか。

種子島久時はすでに述べたように日蓮宗の大スポンサーです。また島津義久夫人の円信院は久時の姉であり、その墓は本能寺にあるので、島津本家も本能寺に関わりがあります。種子島出身の日蓮上人の例もあるように、スポンサーは日蓮宗の人事に経済的な影響力を持っています。つまり島津氏側の意向によって、如竹が屋久杉の本格的開発というミッションをにない、故郷屋久島に赴任した可能性があるわけです。

如竹が屋久杉開発にとりかかったのは、この 1609 年から数年間にわたる第1期本仏寺住職時代ではないでしょうか。時に如竹 40 歳の働き盛りです。この時代の記録はまったく残されていません。

三国名勝図会には、如竹が山中の屋久杉の利用されないのを惜しみ、山に入って 17 日間岳神に祈り、伐採を可能にしたという逸話があります。しかし 16 世紀の初めにはすでに屋久杉は利用されていると考えられ、南九州の豪族の間で木材資源が争奪の対象になっています。少なくとも1563年には大隅八幡宮に屋久杉が使用されたことが記録され、前述のように 80 年代からは島津氏によって屋久杉の移出の禁止命令が発令されています。したがって、この三国名勝図会の記述にある、如竹が屋久杉伐採を開始したというのは明らかに間違いです。

1488 年に本能寺の日増上人が永田岳で岳神と対峙し、法力を持ってこれを抑え、屋久島各村に寺を建設したという逸話が残されています。この時に岳神が納得した形で屋久杉伐採が始められたと考えると、日増の逸話が如竹の業績と混同されて伝えられたのかもしれませんが、あるいは如竹は日増の逸話を利用して、それを強化する形で自らも祈禱を行ったのかもしれませんが。いずれにしても日蓮宗が法力をもって屋久島の岳神のタブーを破り、山の開発を主導して屋久島を経済的に活性化したのは確実でしょう。日蓮宗は実は魔物退散を得意とする教派なのです。

如竹翁伝にある「一説に、斧を一夜杉木に掛けて、斧の倒れたるものは切るべからず」という話は、全国に分布しているもので、屋久島のオリジナルではありません。地元側が外部権力者に木材を奪われたくない時の方便ではないかという説もあるようです。如竹は、この話を屋久島に導入し、逆手にとって屋久杉伐採の心理的ストレスを取り除いたのかもしれませんが。

なお 1638 年、江戸で俳諧のテキスト本『毛吹草』が編纂されます。この中に諸国名物リストが収録されており、大隅のところに、「多禰嶋筒、ヤクノ嶋榑板」と書かれています。このころすでに屋久杉は種子島の鉄砲と並ぶ名産品として、全国的に知られていたことが分かります。

### 5. 藤堂家侍講 NO.1 と文之著作の出版

全国に分布する日蓮宗寺院の住職は、年に 1 回、遠隔地は 2 年に1回と決められていました。このため日蓮宗はすぐれた情報ネットワークを持ち、特に種子島からの海外情報はユニークなものでした。信長が本能寺を利用したのはこの情報を得るためではなかったかとも考えられます。

大阪冬の陣を目にした 1614 年、如竹は本仏寺住職として両本山に上り、そのついでに有馬温泉に遊び、ここで大名藤堂高虎の家老と出会い、人物を見込まれスカウトされたと言われています。この藤堂高虎とはどういう人でしょうか。

豊臣秀吉弟の秀長のもとで実績を積み、戦国時代を實力で勝ち上がった有能な武将で、外様でありながら譜代格として徳川家康の右腕と

なった大名です。猛将として知られていますが、現在まで評価が高いのはむしろその建築家や政治家としての手腕です。

城郭の設計と石工・大工など専属の技術者集団を抱えた藤堂家の施工技術は戦国随一で、多くの名城を手掛けています。特に居城である津城は、堀に港としての機能を取り込み、伊勢湾から家康のいる駿府まで 2 日で移動可能という、スピーディーな移動力を備えたものでした。

また統治者としてもすぐれた力量をもち、徳川幕府における藩体制のモデルを作り上げたのは、高虎だと言われています。津や伊賀上野の城下町を設計・建設して、農地を整備し、加えて高松、熊本など統治のうまく行かないよその藩の行政を代行するなど、地方行政に手腕をふるってます。

同時に中央官僚として江戸―駿府―津を忙しく行き来し、いわば新時代立ち上げのエグゼクティブとして猛烈に活躍しました。江戸城や日光東照宮などの建設も高虎が主導しているようです。

如竹は、この現代でいうなら一流企業とも言える藤堂家に侍講(内政・外交顧問)として招聘されたのですから、ただ事ではありません。

もっとも徳川時代、各大名は争って有名な朱子学者を召抱えようとしていたようです。それは徳川幕府が、幕藩体制維持する哲学的根拠として朱子学を採用したからです。朱子学は孔子の教義や格式・礼儀作法から、世界の成り立つ原理までを幅広く取り込んだ、平たく言うとなんでもありの学問大系で、しかもそれには漢文のテキストを読みこなす必要があり、これが武家の一般教養として、必要とされたわけです。

その朱子学者のトップに位置したのが、先に触れた藤原惺窩や、その高弟で徳川幕府の御用学者となった林羅山でした。

当時この藤原一林派のライバルであった薩南学派のトップ文之は、島津家と徳川家を取り合いを演じたほどの人物で、その No.2 として並び称せられた如竹を、徳川の右腕、藤堂家が確保したというわけです。如竹は藤堂家の「掟書十九条」の制作に進言したとされています。

如竹翁伝の記述には、興味深いことに、屋久島の農業振興や安房の如竹堀建設など、この藤堂家時代にふれ得た技術の実践ではないかと思われる事業が見られます。もし藤堂家が津や江戸で屋久杉を使っていれば面白いのですが、その記録は見つかっていません。

藤堂家時代の如竹のよく知られた実績は、文之の点(し点とか一两点とかの漢文読み下し方法に使われるあれです)の普及テキストの出版です。

1620 年文之が没した後、事実上薩南学派のトップとして、文之による「四書集註文之点」「周易伝義」「南浦文集」などを、藤堂家江戸屋敷を拠点に、江戸や京都の版元から次々に出版して、大いに薩南学派の名を上げたと言われています。四書集註の序文を見ると、「最近いろいろ漢文和訓が行われているが、私はここで師南浦文之の訓読法を、若い人のために紹介する」とあり、如竹がけっこう藤原惺窩を意識していたことが感じられます。水戸黄門として知られる徳川光圀が、如竹を高く評価していたという説話も残っています。

家坂洋子氏と山本秀雄氏は、島津氏サイドが、江戸における薩摩の印象を和らげ、信頼感を醸成すべく、如竹を藤堂家に送り込んだのではないか?という考えだったようです。もうしそうだとするれば、如竹は見事にそのミッションを果たしたことになりますね。

1630 年、藤堂高虎の死を機に如竹は藤堂家を辞去し、本能寺に入って門前の版元から「四書集註」を再版します。その後屋久島本仏寺へ帰ります。

## 6. 琉球へゆく

1609 年、島津義弘は琉球に対し日明関係修復の仲介をとるよう通告しました。しかし琉球はこれを拒否。島津氏は徳川家康の内諾を得て琉球に侵略します。人質になった尚寧王は薩摩へ、そして江戸へと連行されます。この琉球出兵に明が不快感を示し、琉球はそれまでの 1 年 1 頁から 10 年 1 頁と大きく格下げされます。

1622 年になって、琉球は 5 年 1 頁に回復されますが、島津氏は結局対明貿易の確立に失敗し、財政を回復させる切り札を失います。最後に残された手段は琉球を通した中継貿易でした。

1631 年 薩摩藩の財政はいよいよ悪化し、借財は銀7千貫(77億円見当)に上りました。藩は川上又左衛門忠通を琉球へ特任派遣します。薩摩藩としては、1633 年の尚豊王の冊封使の琉球訪問が朝貢回数を増やす最後のチャンスでした。川上のもとへ冠船奉行として新納忠清、最上義時が応援として派遣されました。しかし冊封使に対し、薩摩が琉球を操っているという姿は決して見せられません。このタイミングで、如竹が琉球に来るのです。

如竹翁伝などでは、何となく個人的に琉球を訪れたような書き方をしていますが、この時屋久島へ送られた如竹の手紙には、「まだ帰れない」という箇所があり、ミッションが残っているような印象があります。

琉球で如竹は尚豊王(43 歳)の侍講をつとめ、それまで中国語で読まれていた文章を日本語化して読めるように、文之点による漢文の読方を琉球に広めた、とされています。

しかし琉球王朝にとって一世一代の大事業であり、島津氏の命運を決めるであろう冊封を前に、島津氏の外務官僚をつとめた中国語のエキスパートであり、天下の藤堂家侍講として手腕を振るった如竹が、このタイミングで単に和文読み下し方法を教えるだけで済むでしょうか。

如竹は琉球の外交(貿易?)セクションであった「久米村」の一員らしい明人の梁澤民と交流しているので、やはり冊封を滞りなく進めるべく島津氏の意向を受けて送りこまれ、琉球と明のやりとりをチェックし、島津氏の権益を確保するため朝貢回数を復活させるよう活動したのではないかと推われます。川上やおそらくは如竹の努力の甲斐あって、尚豊王は見事 2 年 1 頁に復帰します。島津氏はほっと一息ついたことでしょう。1635 年に如竹は屋久島へ帰りました。

### 7. 島津家の侍講になる

如竹は大仕事を終えて屋久島に帰るたびに、俸給を屋久島のために惜しげもなく使ったと言われています。

1640 年、71 歳の如竹を島津光久が世子綱久の侍講として 300 石で招聘します。一石≒4 万円として年棒 1200 万。なかなかではないでしょうか。この時期如竹は屋久島と鹿児島を行ったり来たりしていたようですが、光久は如竹のために鹿児島本仏寺を建立します。

1642 天下泰平となった徳川時代の、都市建設のための激しい木材需要によって、全国的に森林資源が枯渇しました。このため、幕府が伊豆、天竜、吉野等を直轄地とし、また木曾を名古屋藩領にするなどして、植林事業に乗り出します。屋久島の天然木材資源を擁する島津氏にとって、これはビッグチャンスです。この年**屋久島代官**が置かれ、屋久島はいよいよ大規模な伐採事業が軌道に乗り始めたようです。

1644 正保元(75 歳)帰島していた如竹に、藩主江戸より帰国するので至急鹿児島に来てほしいと呼び出しがありました。この年、なんと明が減び、清が首都を北京に移したのです。関連性を裏付ける資料はありませんが、中国、そして琉球の状況分析と、対応策の検討は島津氏にとって不可欠だったはずです。頼りになるのはやはり如竹だったのではないでしょうか。

### 8. 引退

78 歳となった 1647 年、如竹は島津家の侍講を辞し、屋久島へ帰ります。法華宗徒が鹿児島には法華の大寺院がないので、如竹上人を開

山として寺を続けるべきであると主張したのを、如竹は無駄であるとして寺を撤去しました。報酬のほかにもその300石分の金を屋久島に持ち帰り、用水川建設などさまざまな事業に使ったといいます。

1649 年如竹 80 歳にして最後の大坂行き。1655 年 86 歳で死去。時代の大舞台を転戦するような、ダイナミックな生涯でした。

如竹の書き残したものは非常に少ないのですが、いくつか味わい深い漢詩が残されています。

為客多年雜世塵 帰来生喜故郷春
只今天下泰平日 茅屋解衣安此身
(長年各地で世塵にまみれ働いてきたが、やっと屋久島に帰って来たなあ。いまや天下泰平、茅葺の家で、心から寛いでいる。)

遠去洛城西海涯 對人日々説桑麻
重陽佳節隨鄉俗 獨酒盃中酌菊花
(都を去って遠く西海の涯で、のんきに農業のことなど教えたりしている。秋のいい日にはにごり酒を酌みかわしながら。)

現代の屋久島で疲れを癒している人に、通じるものがあるのではないのでしょうか。

最後にもうひとつ、屋久島の如竹の元を訪れた若き朱子学者、愛甲喜春への送別の詩です。

分袂春風江畔春 天涯萬里布帆新
請君燈火尋書義 再會雞期衰老身

袂を分かつ春風、安房川河畔の春。
天の涯、万里の遠方へ向かって新しい布帆を張れ。
よく勉強をして。再開を期したいが、この年ではもはや無理だろう。(残念だがこれが永の別れだ。がんばりなさい)

如竹と分かれ、再び乗船した喜春の心や知るべし、です。

如竹と屋久島をめぐる動きはまだまだ謎が多いのですが、今回はここまでとします。

### 主な文献

三国名勝図会 1843
儒僧の泊如竹日章 松井日俊 1997 桂林学叢 16 号
薩摩蔭絵巻 家坂洋子 1982 八重岳書房
近世琉球における漢籍受容 高津孝・奄美レターNo.5. 鹿児島大 2004
上屋久町郷土誌 1984
屋久町郷土誌 1993-2007
屋久島歴史小年表 山本秀雄編 2007
種子島家譜
天文法華一揆 今谷明 2009 洋泉社 MC 新書
寺社勢力の中世 伊東正敏 2008 ちくま新書
周辺から見た中世日本 日本の歴史 14 2001 講談社
鹿児島県の湊と薩南諸島 松下志朗・下野敏見 2002 吉川弘文館
海洋国家薩摩 徳永和喜 2011 南方新社
琉日戦争一六〇九 2009 上里隆史 ボーダーインク
海の王国・琉球 上里隆史 2012 洋泉社
鉄砲伝来前後 種子島開発総合センター編 1986 有斐閣
倭寇 田中健夫 1982 講談社学術文庫(文庫化 2012)
中近世移行期の種子島氏 山下真一 2006 日本歴史
Wikipedia



## YNAC あのスタッフは今



### 古賀早苗さん(旧姓藤村)ー1999年～2007年

現在私は、エコツアーガイドの主人と今年5歳の娘と3歳の息子とともに屋久島で専業主婦として過ごしています。インドアなライフスタイルに変わったため、あれだけ大好きだった季節を彩る花々や木々の名前も忘れてしまい、今では「あの・白谷雲水峡に咲く小さな花って何だっけ?」と主人に尋ねる有様です。しかし、主人が行ってきた縦走の話聞いてワクワクしたり、子供達と森へドライブに出かけたりと屋久島を楽しむ気持ちは未だ心の中にしっかりと根付いています。

また、娘が幼稚園の野外活動で「自分の木探し」(自分の気に入った

木に名前をつけ、1年間かけて観察していくプログラム)をしていた際、「ヤマモガシ」というマニアックな木を選んできた時には「ガイドの素質ありか? 将来YNAC入社かー!」と思いましたが、理由は仲の良い友達の木の横だったからでした。すっかり親バカになっております。

屋久島に来て14年、今ではここが家族とともに時を過ごすホームグラウンドになりました。その原点はYNACとの出会いであり、大変感謝しております。今後とも様々な出会いの架け橋としてYNACが更なる躍進を遂げられることを切に願っております。

### 持原道子さんー1999年～2003年

私は地元宮崎で元気に暮らし、野山歩きや山に木を植え育てる活動などを楽しんでいます。

一番の近況は、自転車でこけたことでしょうか。このことは、屋久島にいるころやはり自転車でこけ、手足と顔面も派手に擦りむいたことを、鮮やかに思い出させました。すぐ森に入り熟れていたヤマモモをガブガブ食べたこと、診療所に連れて行かれたこと。にこにこ笑っていても、「お前、その顔でお客さんの前に出るな!」とも言われたものです。

このように、YNACでお世話になったことが今もひょっこり浮かんできます。ありがとうございます。(今回は自分から病院へ行きました。)



### 岡田愛さんー2000年～2007年

10周年記念号にスタッフとして参加したと思うと、時の経過の早さにびっくりです。ニュージーランドに移住して6年になりました。一昨年ニュージーランドの永住権を取得し、昨年「動物のお医者さん」になるため、10数年ぶりに受験勉強をはじめ、現在学生です。まずは大学の専門課程に入ることが当面の目標ですが、将来両国で活躍できる仕事ができることを夢見ています。

### 小林律子さんー2003年～2011年事務担当

お三方に出会った1994年。皆さんが30代だったあの頃と変わらないのはその好奇心。いつも少年のようにキラキラした瞳で熱く語る、やはりそれがYNACの最大の魅力なのでしょう!卒業した人達が各所で活躍している事もYNACならでは!!これからも若い世代を育てつつ、ずっと現役で探究し続けて下さい。私は今、老舗恵命堂に勤めています。胃腸や“のんかた”には「恵命我神散」「屋久島ウコン」をどうぞ!



### 高橋宏美さん(旧姓浜崎)ー2000年～2008年

私は2008年にお世話になったYNACから独立し、現在は屋久島ダイビングステーション「まる」というダイビングショップを夫婦で立ち上げガイドをしています。YNAC在籍中に教わった全てのが今の自分の糧になっています。

また在籍中は解らなかったのですが、今は経営者としての判断に日々試行錯誤しています。大変なことも多いですが、自分が大好きな海というフィールドを仕事場にできることに誇りを感じ、同時にゲストの方の笑顔に支えられながら頑張っています。



### 内室紀子さん(旧姓鷲尾)ー2001年～2009年

YNAC研修生として押しかけて始まった、私の屋久島暮らしも、13年となりました。昨年は、私たち家族に、長男・春太郎(しゅんたろう)という新たな仲間が加わりました。息子と畑に出て土をいじり、川で昼寝をし、ふくろうの声を子守歌とする日々、人と自然が緩やかに繋がりながら暮らすことの幸せを、改めてかみしめています。

YNACも、私たちYNAC・OBも、まだまだこれから!さらに愉快地に生きていきましょう。

### 佐藤崇之さんー2004年～2008年

私は2008年にYNACから独立し、同じ屋久島の地でエコツアー業(オーセン)を営んでおります。3年前には娘も生まれ、日々楽しく暮らしております。YNAC時代にはスタッフの方々をはじめ、たくさんのお客様に助けられ支えて頂きました。本当にありがとうございました。これからも日本一、いや世界一のエコツアー集団としてご活躍することを願っております!



### 長谷川りえさんー2004年～2008年

間接的にでもYNACで教えてもらった自然の面白さを伝えていけたら、と某アウトドアメーカーに勤務しています。

都会暮らしではありますが、朝方に降る雨の静けさや頬をなでる風のさわやかさなどを感じる度に屋久島で見た、聞いた、感じたことを、今でも鮮やかに思い出します。最近、六車由美さんの『介護民俗学』という本に影響を受け、介護の勉強も始めてみました。YNACで得たものを活かしつつ、こちらでも何か面白いことを始められたら、と計画中です。プライベートでは残念ながら特に報告することもないですが「新婚旅行はYNACで」と決めているので、そろそろ準備して待っててくださいね。





日付	出来事	担当	コメント
2003			
6/19	マリアウ・ベイズン自然保護区視察	小原・岡田	シーカヤックで海を遊び尽くそうという海部でした。小刻みにまわって屋久島1周を目指してきましたが、矢筈岬の先端部のみを残して終了したのが少し心残りです。
8/6	NHK未来への航海サポート	鷲尾	
8/30	ダイビングクラブ発足/現在も継続中		
9/2	星嶺国際高校修学旅行		
9/5	立教大学ワークショップ		
9/17	海部発足/2006年9月ほぼ屋久島1周して終了	岡田	初めての屋久島から外へ飛び出した国内ツアー。翌年第2回目も開催されました。
10/7	風の空対馬の森を往く	岡田	
10/28	世界遺産登録10周年記念シンポ、パネラー	岡田	
10/31	全国エコツーリズム大会in阿蘇パネラー	松本	
11/6	タスマニアツアーへ講師	市川	2001年から4回実施。以後は現地のガイドAJPRの千々岩さんにまかせ現在も継続中。吉岡啓子さん著のタスマニアという本に自然の解説を書かせていただきました。
12/27	タイの照葉樹林へ講師	小原	屋久島の自然をもっと詳しく知ってもらおうと企画した屋久島自然クラブの半日のフィールドワーク講座。
2004			
1/30	鷲尾NZ研修	鷲尾	YNACが屋久島で独自に行ったガイド養成セミナー。西表島のリゾートホテルから研修生が来て物議を醸す。
2/25	熊野エコツアーガイド養成講座	松本	
2/25	知床博物館講演/世界遺産10年を過ぎて	市川	
2/28	日本トイレ協会縄文杉ルートの水場における水質について発表	小原	
5/22	ロシア沿海州調査	市川	
6/4	半島ツーリズム大学エコツアーガイド講師	松本	
6/10	台風4号で白谷線1ヶ月通行止め		
9/2	屋久島地区エコツーリズム推進協議会発足		
9/5	知床リレーフォーラム	松本	
11/5	白山山地パネラー	松本	
12/13	知床、小笠原、屋久島エコツーリズム懇親会ガイ連主催	松本	
2005			
1/15	土曜日の森~第2土曜日の森		
1/29	丹沢オーバーユースシンポで事例報告、パネラー		
2/18	YNACエコツアーガイド養成セミナー		
4/29	GWスライドショー		
6/5	第1回環境省エコツーリズム大賞特別賞受賞		
7/11	夏休みスライドショー		
7/19	観光協会ガイド部会長に松本が就任		
7/29	高速船ロケット就航。市丸vs岩崎戦争始まる。		
10/4	屋久島ガイド登録制度スタート		
2006			
2/17	環境省エコツーリズムセミナー講師	松本	環境大臣に表彰されるもアピール不足で地元紙にも取り上げられず、なんとなく尻すぼみに終わる。所詮、大臣表彰など似合わないか!?
2/20	西海市エコツーリズム推進アドバイザー	松本	
4/7	YNAC・IEツアー宣言		
4/29	GWスライドショー		
7/28	夏休みスライドショー		
8/27	吉田の堤防から転落。奇跡の生還		
9/21	東京ビックサイト世界旅行博屋久島ブース担当		
11/11	風の旅行社15周年記念パーティー		
11/11	第1回佐世保エコツーリズムフォーラムパネリスト		
2007			
1/14	原生自然環境保全フォーラムパネリスト	松本	今やエコはあたりまえ。YNACは1歩進んだエンターテイメントを目指します。
2/27	ブルネイ・フィリピンサーベイツアーに参加	市川	会議に明け暮れ疲労困憊だったのででしょうか?詳しくは巻頭言を。
3/11	皆生エコツアーガイド養成講座	松本	値下げ合戦の消耗戦に入るも2011年4月に合併して戦争終結。一時は値下げの影響で、屋久島の人達が気軽に鹿児島に行けるようになり、入り込み客数が増加した。
3/30	口永良部島国立公園に編入	松本	未だに認定制度に至らず。
4/26	藤岡事務バイト(小林産休のため)		
4/28	GWスライドショーの実施		
6/27	エコツーリズム推進法施行		
7/11	屋久島高校職場体験~以降毎年のように受け入れ		
7/14	台風4号47.2m荒川林道決壊		
9/1	YNAC HP アクセス100万件突破		
9/21	千年美肌 屋久杉銘水石鹸発売		
10/1	屋久島町誕生		
10/9	一湊小学校4-6年生総合学習酸性雨の話		
12/17	JESガイド部会長に松本が就任		
12/18	八幡平エコツアーガイド養成講座		
12/21	小笠原エコツアーガイド勉強会アドバイザー		
2008			
1/6	NHK大河ドラマ篤姫。篤姫人気で鹿児島観光ブームが訪れる。		
1/9	自動車2種免許取得講習		
1/29	国際サンゴ礁年東京サンゴカフェ ゲスト出演		
2/3	佐世保市役所観光課屋久島研修		
2/7	第1回ブルネイツアー講師~以降現在まで4回実施		
2/13	桜島まるごと博物館構想講師		
2/19	瀬戸内町役場エコツアー研修		
3/1	岡山理科大学ダイビングライセンス講習		
3/6	目黒エコツアーガイド養成講座		
4/1	屋久島山岳部保全募金始まる		
5/18	国際サンゴ礁年桜島イベント実行委員長に就任		
6/4	岐阜県立森林文化アカデミー講義		
7/1	YNAC15周年、散歩亭にて記念パーティー		

7/19	環境省子供パークレンジャー講師塚崎	
7/22	遠賀高校修学旅行	
9/15	リーマンショック	
9/18	JICA研修	
10/6	伯耆エコツアーガイド養成講座	
10/24	屋久島警察署山岳登攀技術講習	
11/2	文教大学エコツーリズム実習	
11/11	岡山理科大学と業務提携調印式+記念講演	
12/5	YNAC15周年東京祝賀会	
12/6	JESエコツーリズム大会小笠原パネリスト	
12/27	科学技術振興財団教員免許更新講習/2009年にも実施	
2009		
1/24	東亜大学市民フォーラム講演	
1/31	ボルネオ観光地の価値を高めるためのIP技術講演	
3/2	岡山3大学Triangle実習	
3/15	JES10周年記念大会コーディネーター	
3/26	比留間雄太研修開始	
6/10	立正大学屋久島実習	
7/1	北山裕子事務バイト開始。現在自然クラブの世話人。	
7/22	屋久島で皆既日食	
8/27	岡山理科大学附属中等学校研修旅行	
9/1	岡山理科大学エコツーリズム技法	
9/16	台湾からの大量の流木で高速船欠航	
9/16	政権交代で民主党鳩山内閣樹立	
10/1	葉山安全講習会講師	
10/21	白馬エコツアーガイド養成講座	
11/3	佐渡エコツーリズム会議講師	
12/30	NZ北島ツアー講師	
2010		
1/23	種子島エコツーリズム講演	
1/28	奄美大島安全講習会講師	
1/30	観光協会キャンペーン鳥取	
3/9	慶良間エコツーリズム推進フォーラムパネリスト	
3/31	大森繁研修開始も10月には帰還	
5/19	風の旅行社トークショー	
5/21	能登エコツアーガイド養成講座	
6/6	鳥羽エコツアーガイド養成講座	
6/20	きのくに国際高等専修学校修学旅行	
7/7	屋久島にモスバーガーオープン	
7/14	知床世界遺産5周年シンポジウムパネリスト	
9/26	ヘリコプター墜落、紀元銘水飲用禁止	
11/5	JICA研修	
11/7	ODSS屋久島研修	
11/17	瀬戸内町エコツーリズム実習	
12/24	岡山理科大学教員免許更新講習	
2011		
3/8	水俣愛林館スタッフ研修	
3/11	東日本大震災	
3/22	瀬戸内町エコツーリズム実習	
4/1	宮浦中学と小瀬田中学が統合され中央中学が設立	
4/6	池田裕二研修開始	
4/17	自然クラブ復活/西部照葉樹林	
4/25	新料金スタート	
4/28	ホームページリニューアル	
5/13	鹿児島大学共通教育「エコツアー入門」実習講師	
5/25	岐阜県立森林文化アカデミーにてインタープリテーションの講義	
5/26	JICA研修	
6/20	佐渡エコツアーガイド養成講座講師	
6/21	屋久島町議会がエコツーリズム推進法全体構想を否決	
8/16	東京私立中学高等学校協会生物教諭研修	
8/29	福井県SSH研修	
10/12	鳥取東高校修学旅行。これ以降毎年来てくれています。	
10/20	二戸復興支援エコツアーリズム大会コーディネーター	
11/5	JICA研修	
12/18	環境省世界遺産シンポジウム/サンゴモニタリング事例発表	
2012		
1/2	マウンテンバイクポタリング開始	
3/16	屋久島国立公園の独立	
4/22	トッピーのクジラ衝突事故に巻き込まれる	
4/24	JICA研修	
5/12	屋久島で金環食	
6/7	JRホテルとの提携ツアー	
6/8	海辺の環境教育	
6/16	風の旅行社主催東北支援シンポジウム参加	
6/24	中国雲南省スタディーツアー	
6/29	自由の森学園修学旅行	

松本	リーマンショックを境に、増え続けた屋久島観光客が減少に転じました。
松本 小原	以後役員3名は岡山理科大学の非常勤講師として毎年エコツーリズム技法の実習を受け入れています。
松本 小原 松本 松本 市川	コタキナバルとバンダル・セリ・ブガワンでの初めての英語での長時間講演に疲れ果てました。これを機に携帯電話を購入。
松本 市川	世紀のイベントでしたが前日までの好天にもかかわらず当日は嵐となつて、雨雲で暗いのか日食で暗いのかわからぬ始末。フェリー屋久島2の皆既日食ツアーだけがダイヤモンドリングの輝きを見ることができました。残念。あの時迷惑料として来島者から集めたお金は、どこへ行ったのでしょうか?
松本 松本 松本 小原	あの日の熱気は一体どこへ行ったのでしょうか?
松本 松本 松本 松本	NZの岡田とタイアップしてカウリの森などを見るエコツアーを実施しました。
松本 松本 松本	屋久島に初めてのファーストフード店が出店。モスバーガーは好きなので喜んでものの、それだけでは行かないということが判明。
市川	沖縄環境クラブが行う「アジア・大洋州地域熱帯・亜熱帯におけるエコツーリズム企画・運営」研修がこの頃より毎年行われており、アジアや中南米の行政関係者を中心とした参加者を迎えています。
小原	全く信じられないようなことが起こりました。お亡くなりになった方々の冥福をお祈りするとともに、被災地域の復興を祈らずにはおれません。またこの時世界中から受けた暖かい支援を忘れてはならないと思います。YNACでも松本が東北支援に奔走しました。
小原 市川	国内初の全体構想承認を目指したものの、縄文杉への入山規制に強く反発がでて、全会一致で否決される。東京の大学に進学していた屋久島高校卒業生が、屋久島は何をやっているのだとあきれていたのが印象的でした。
松本	のんびりと里をまわって、季節の花やおいしい食いを楽しむツアーが好評です。
松本	ブルネイツアーの帰りに飛行機欠航のため乗り換えたトッピーがクジラと衝突。市川・池田が巻き込まれる。池田はNHKの全国ニュースでテレビデビュー。詳しくはYNAC通信29号をご覧ください。
松本 小原	この日もあいにくの雨でしたが、今度こそその執念でJRホテル前は、直前に雨が上がり、美しい金環食を見ることができました。



# Calendar 2012-13

2012

- 7/4 半日沢登りツアー開始  
 7/12-30 大阪コミュニティーアート専門学校の吉永くん短期研修  
 7/23 小原 屋久島BOOK 沢登り取材  
 7/25-26 春日部高校・銘溪学園実習講師  
 8/1-3 教員免許更新講習・岡山理科大学  
 8/24-27 風カルチャークラブ『初めての屋久島』  
 8/25 小原 鹿児島県教職員組合研修講師  
 8/27-9/9 鹿屋体育大(ヨット)の牟田さん短期研修  
 9/6-10 岡山理科大学エコツーリズム技法実習  
 9/10-13 大学生協エコツアー  
 9/10-19 風の旅行社ネパール支社テクさんエコツアー研修  
 9/13-20 小原 佐渡エコツアーガイド養成講座講師  
 9/17 文教大学海津ゼミ研修  
 9/21-23 松本 旅博にてYNACブースを出店  
 9/23-24 倉敷芸術科学大学縄文杉登山講師  
 9/27-29 岡山理科大学附属中学研修旅行  
 10/4-5 松本 東京環境工科専門学院スノーケリング実習  
 10/8-10 セントラルスポーツダイビングツアー  
 10/11-13 JICA 屋久島エコツーリズム研修(中南米)  
 10/14-15 松本 東京環境工科専門学院スノーケリング実習  
 10/16-18 鳥取東高校研修旅行受け入れ  
 10/19 松本 安房小学校遠足『海の自然観察』  
 10/23-11/7 大阪コミュニティーアート専門学校の生駒くん短期研修  
 10/28-29 松本・池田 ダイビングクラブ 口永良部島  
 10/31-11/1 小原 毎日新聞元日1面コケと縄文杉取材  
 11/4 市川 屋久島トレッキングブック取材白谷  
 11/5-6 松本 サンゴ調査種子島  
 11/6 市川 読売新聞正月企画取材白谷  
 11/8-11 小原 奥入瀬コケ講師  
 11/13 小原 東京救済“六次元”で屋久島ナイト  
 11/16 小原 八幡小学校で地層の実習  
 11/17 松本・小原 NPO当別エコロジカルコミュニティ研修講師  
 11/23 小原 脳科学者茂木健一郎氏の取材を受ける  
 11/26-29 小原・比留間 WMA 野外救急救命講習  
 11/29 松本 リポーン香岐氏の取材  
 12/8 松本淳子 自然クラブ キャンドル作り  
 12/12-13 小原 ノースビレッジ研修  
 12/16 小原 自然クラブ『コケトリップ』特別講師に林田氏  
 12/21 第1回キャンドルナイト 小原によるコケの話  
 12/22-25 風カルチャークラブ『初めての屋久島』

2013

- 1/18 小原 名古屋大学研修講師  
 1/23 松本 世界遺産20周年記念ソングお披露目会で細川たかしの前で太鼓を叩く  
 1/28-2/1 松本 大山エコツアーガイド養成講座  
 2/9-11 風カルチャークラブ『初めての屋久島』  
 2/19-21 市川 亜細亜大学小林天心ゼミ卒業旅行  
 2/26 第2回キャンドルナイト 松本によるサンゴの話  
 3/2-7 小原 コケフォーレ in 屋久島に参加  
 3/12-13 松本 サンゴモニタリング1000報告会に参加

# Contents

巻頭言 エコツーリズムの20年	松本 毅	1
台風13号その後—自然の20年	市川 聡	5
寄稿 YNAC20周年に寄せて	西村直樹、加藤真智子、中村明美、松本洋	6
9年目です	樫村精一	8
山ガールあれこれ	池田裕二	9
夢の向こう側	松本淳子	10
幸せの感じ方	比留間雄太	10
「20」	渡部 幸	11
屋久島の歴史・泊如竹の時代	小原比呂志	12
あのスタッフは今	旧スタッフ一同	16
YNAC20年史後半	市川 聡	18

- 3/17 ギョボク植樹(事務所前に木山税理士お手植え)  
 3/27-30 風カルチャークラブ『初めての屋久島』  
 4/1 「とび魚の塩こうじ漬け」をけい水産とコラボで発売  
 4/9 第6期研修生 渡部幸 研修開始  
 4/11 YNAC 事務所新装オープン 夜第3回キャンドルナイト  
 市川がPC屋久島情報室の紹介と動物の話  
 4/20 市川 海祭りで春牧区の育成会講師と体験カヌー手伝い  
 4/22-24 JICA エコツーリズム研修アジア太平洋地域  
 5/20-21 富山青空事務所エコツアー  
 5/24-31 小原 中国吉林省エコツアー調査  
 6/1 佐野良介くん短期研修開始

## 執筆・取材記事

- ・屋久島の里の花ハンドブック春牧集落から(市川編集責任)春牧区  
 屋久島の春牧集落内で見られる里の花386種を収録。これ1冊で野草から園芸植物まで花の色で検索できます。500円で絶賛発売中!
- ・ROKKO Spirit 松本の母校六甲学院の75周年記念誌にインタビュー記事
- ・屋久島トレッキングサポートBOOK2013(市川)NECO MOOK 1753  
 ガイドさんと歩く特別な屋久島「白谷雲水峡フォレストウォーク」。
- ・屋久島ブック2013(小原)別冊山と溪谷社  
 エコツアーで行こう! 沢登り体験ツアー

## 編集後記

☆20年を振り返ってみるとあっという間だった感じがしますが、時代は確実に変化してきました。これから屋久島はどんな変化をしているのでしょうか?(た)☆与作(コンデジの愛称)の素晴らしさに脱帽の日々です!(さわ)☆期せずしての再会…20周年パワーだ!(じ)☆海女ちゃんもぜひ屋久島へ(ゆい)☆愚行も固執すれば賢者となるを得ん。前へ。(さい)

## YNAC通信(ワイナックつうしん) NO.30

20周年記念号 発行日:2013年7月1日

発行:南屋久島野外活動総合センター

住所:〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦368-21

TEL 0997-42-0944 FAX 0997-42-0945

E-mail: forest@ynac.com URL: <http://www.ynac.com/>

Facebook <http://www.facebook.com/Ynacyakushima>